元刊雑劇の研究（五）「李太白貶夜郎」全訳校注（前篇）

赤松紀彦[1]・金文京[2]・小松謙[3]・佐藤晴彦[4]・荀春生[5]・
高橋繁樹[6]・高橋文治[7]・竹内誠[8]・土屋育子[9]・松浦恆雄[10]

本稿は元刊本雑劇研究会の成果に基づくものである。各担当者の原稿をもとに、討論の内容により修正を加えた。全体のまとめは小松が担当した。なお、「元刊雑劇の研究」（一）～（四）は『元刊雑劇の研究──三奪槊・氣英布・西蜀夢・單刀會』として、二〇〇七年汲古書院より刊行されている。

凡例

①異体字・俗字も含め、本文の用字については、明らかな誤字・略字も含めて、ひとまず元刊本にできるだけ忠実な字を用い、その上で校勘を加えている。

②押韻箇所は「。」、韻を踏まない区切れの箇所は「、」で示した。「△」は句中蔵韻（一句の中で更に韻を踏む字があるもの）を示す。

③明らかに字の誤りと思われるものについては、（ ）内に正しい字と思われるものを付け加えた。ただし、白話文学の世界で史書とは異なった文字が通常用いられている場合には、改めることはせず、注で指摘するにとどめた。また、誤字であることは確かだが、正しい字を定めがたいものについては、原文のままとした。原テキストには存在しないが明らかに脱字があると考えられる場合には、《 》に入れて補うかたちを取った。また明らかに衍字と思われるものには〈 〉を付した。

校勘に使用したテキストは、鄭騫『校訂元刊雑劇三十種』（世界書局一九六二。鄭本と略称）・徐沁君『新校元刊雑劇三十種』（中華書局一九八〇。徐本と略称）・寧希元『元刊雑劇三十種新校』（蘭州大学出版社一九八八。寧本と略称）である。本劇の伝存テキストは元刊本のみで、異本は存在しない。

なお字体は、原文・引用・人名は繁体字、他は新字を使用した。

古杭新刊關目的本李太白貶夜郎

〔校〕○本劇第一折は李開先『詞謔』に収められている。以下「詞本」

として示す。なお、李開先は現存する元刊雑劇三十種の所有者の一人として知られる。

〔注〕○『錄鬼簿』には、各本とも王伯成の項に「貶夜郎」または「李太白貶夜郎」として著録があり、『太和正音譜』も同様。王伯成については、『錄鬼簿』諸本に「涿州人。有天寶遺事諸宮調行于世」とあり、作品としては他に「張騫泛浮槎」が著録されている。『錄鬼簿』天一閣本などに見える賈仲明の「吊詞」には、「伯成涿鹿俊丰標。公末文詞善解嘲。天寶遺事諸宮調。世間無天下少。貶夜郎關目風騷。馬致遠忘年友。張仁卿莫逆交。超群類一代英豪（伯成は涿鹿の二枚目。芝居の文句で巧みに弁解。『天寶遺事諸宮調』は、この世にまたとない出来映え。「貶夜郎」の筋は文学の香り高い。馬致遠の忘年の友、張仁卿とは莫逆の交わり。群を抜いた一代の英傑）」とあり、馬致遠より少し後の世代だったようである。現存する作品としては、「貶夜郎」のほか、『天寶遺事諸宮調』のかなりの部分が『雍熙樂府』などに残され、凌景埏・謝伯陽校注『諸宮調兩種』以下、複数の輯本も作られている。

《第一折》

〔駕上　云了〕〔高力士云了〕〔太真云了〕〔祿山上了〕〔外末宣住了〕〔正末扮上　開〕小生姓李名白字太白。曾夢跨白鶴上昇。吾非个中人也。

〔校〕なし。

〔注〕○外末……後の展開から見て高力士のことと思われるが、確実ではない。第一折で扱われているのは、「醉草嚇蠻書」と「清平調」の故事である。前者は『警世通言』巻九「李謫仙醉草嚇蠻書」で知られるが、古い文献には見えない。おそらく魏顥の「李翰林集序」に「上皇豫遊、召白、白時爲貴門邀飲。比至、半醉、令製出師詔、不草而成（上皇（玄宗）が遊宴の折に李白を召されたところ、白は高貴な方のお屋敷の酒宴に招待されていた。着いた時には、半分酔っぱらった状態であったが、出陣の詔を書かせたところ、下書きもなしに書き上げてしまった）」とあることや、樂史の「李翰林別集序」に「草和蕃書、思若懸河。帝嘉之、七寶方丈、賜食于前、御手調羹（異国に送る親書を起草させれば、構想が川の流れの如くよどみなくわいてきた。陛下はこのことを嘉せられ、七宝で飾った方丈にて、御前で食を賜り、御自らスープの味付けをなさった）」とあることなどから出た伝説であろう。本劇はこの話を伝える文献としては最も古いものになる。後者については、唐の李濬の『松窗雜録』にいう。「李龜年以歌擅一時之名、手捧檀板、押衆樂前欲歌之。上曰、賞名花、對妃子、焉用舊樂詞爲。遂命龜年持金花牋、宣賜翰林學士李白進清平調詞三章。白欣承詔旨、猶苦宿酲未解、因援筆賦之、『雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。若非羣玉山頭見、會向瑤臺月下逢』『一枝紅艷露凝香、雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧』『名花傾國兩相歡、長得君王帶笑看。解釋春風無限恨、沈香亭北倚欄杆』。龜年遽以詞進、上命梨園子弟約畧調撫絲竹、遂促龜年以歌。太眞妃持玻瓈七寶杯、酌西涼州蒲萄酒、笑領歌、意甚厚。上因調玉笛以倚曲、毎曲遍將換、則遲其聲以媚之。

太眞飲罷、飾繡巾重拜上意。龜年常話於五王、獨憶以歌得自勝者無出於此。抑亦一時之極致耳。上自是顧李翰林尤異於他學士。會高力士終以脱烏皮六合爲深耻、異日太眞妃重吟前詞、力士戲曰、始謂妃子怨李白深入骨髓、何拳拳如是。太眞妃因驚曰、何翰林學士能辱人如斯。力士曰、以飛燕指妃子賤甚。太眞頗深然之。上嘗欲命李白官、卒爲宮中所捍而止（「玄宗が牡丹をめでて宴を催し）当代一の歌手といわれた李龜年が、手に檀の拍板を持ち、楽師一同を率いて進み出て唱おうとしたところ、陛下は、「名花をめで、貴妃に向かい合うのに、古くさい歌詞など使えるものか」とおっしゃると、龜年に命じて、金泥の箋紙を翰林学士李白に賜り、「清平調詞」三章を進呈させられた。李白は喜んでご命令をお受けして、まだ二日酔いも醒めぬままに、筆をとってうたを作った。「雲は衣か、花はかんばせか、春風おばしまを払えば、露浮かべた花は濃艶。まみえるところは仙女のおわす群玉山の上か、月のもと仙界なる玉のうてなのほとりか」「一枝のあでやかな紅の花に、香は凝って露となり、巫山にかかる雲雨の交わり思うて腸断つのもあだなこと。さて漢の宮にてはどなたに似ておられよう、あわれ飛燕の化粧終えて誇るがそれか」「めでたき花に傾国の美女、ともどもに楽しみかわすそのかたわらに、みかどは常に笑みをたたえて見守りたまう。春風にこめられたはてもしらぬかなしみ解き去って、沈香亭の北、おばしまにもたれる」。龜年が急いでうたを進呈すると、陛下は梨園なる楽師たちにおよその曲調を定めて楽器を演奏させ、龜年をせき立てて唱わせられた。太眞妃（楊貴妃）は、七宝ちりばめたガラスの杯に、西のかた涼州なる葡萄の杯を酌んで、笑みつつ歌を聴いて、いたく満足げな様子であった。陛下は曲にあわせて玉笛を吹かれて、節が終わろうとするごとに、テンポを落として貴妃に媚びられた。太眞は飲み終えると、刺繡した布を身につけて、陛下の厚意に対して二度拝礼を行った。龜年は、いつも陛下のご兄弟がたに、自分の記憶の限り、この時ほどすばらしく唱えたことはなかったといっていたという。これも当代の極致というべきものだったのであろう。陛下はこれ以来李白を他の学士たちよりずっと重んじるようになられた。折しも高力士は、長靴を脱がせられた恥辱を忘れかね、後日太眞妃が例のうたをまた口ずさんでいたとき、冗談めかしていった。「貴妃様は李白に対して恨み骨髄と思っておりましたのに、どうしてこんなにお気に入りなのです」。それを聞いた太眞妃が驚いて「翰林学士がそうしてそんなに私を馬鹿にできるっていうの」と聞くと、力士は「貴妃様を趙飛燕になぞらえるなど、ずいぶんと賤しめた言い方じゃありませんか」とこたえた。太眞はなるほどと思った。陛下は李白に官を与えようとされたが、結局宮中からの横やりが入って実現しなかったのである）」。ここには酔っているところを連れてこられたことは見えないが、『舊唐書』巻百四十下「文苑傳下」には、「玄宗度曲、欲造樂府新詞、亟召白。白已臥於酒肆矣。召入以水灑面、即令秉筆、頃之成十餘章。帝頗嘉之。嘗沉醉殿上、引足令高力士脱靴。由是斥去（玄宗が曲を作って、新しい歌詞がほしくなったので、至急李白を召したが、李白は飲み屋で酔いつぶれてしまっていた。召し寄せて、顔に水を掛けると、早速筆をとらせたところ、あっという間に十餘章ができあがった。帝はいたく嘉せられた。宮中で泥酔して、足を伸ばして高力士に

靴を脱がせたことがあったが、このために放逐されることになった）」と見える。ここでは玄宗・高力士・楊貴妃・安祿山が登場して、外国からの書簡に対する対応のことを話し（あるいは宴会のことも出るのかもしれない）、李白を呼ぶことが演じられるのであろう。〇宣住……「宣」は皇帝の命を伝えること。元刊本においてト書きで用いられている例としては、「遇上皇」第四折に「駕上云了　宣住」、「周公攝政」の楔子に「駕上　宣住」、第一折に「外上　宣了」、第三折に「宣浄了」、「薛仁貴」の第一折に「駕上　開住　交宣了」（この場合「宣」は名詞であろう）、第三折に「宣外末還郷了」、「霍光鬼諫」第一折に「駕上　宣二浄了」があるほか、本劇第二・三折にも事例があり、演劇用語として定着していたものと思われる。「住」は元刊本に頻出する用語であるが、意味は定かではない。『元刊雜劇の研究』（以下『研究』と略称）百三十一頁の注参照。〇个中人……関係者、その世界の中の人。蘇軾「送金山郷僧歸蜀」詩「我非箇中人、何以嘿識子。振衣忽歸去、隻影千山裏（私は身内でもないものを、何もいわないのになぜあなたのことがわかったのやら。衣を振るって突然故郷に帰り行く、あまたの山々の中に孤影を落とし）」など詩詞にも例が多い。また、「還牢末」（趙本）第一折の正末の白に「二嫂蕭娥、他原是箇中人、我替他礼案上除了名字、棄賤從良、就嫁了爲我妻（第二夫人の蕭娥は、もと妓女ですが、名簿から名を消して良民にしてやったので、我に嫁ぎました）」とあるように、妓女を指す言葉としても用いられる。ここでは、俗世に関わる者という意味であろう。

〔訳〕［駕（玄宗）登場。いう］［高力士いう］［太眞（楊貴妃）いう］［安祿山登場］［外末（高力士）勅命を伝える］［正末扮装して登場。開］私、姓は李、名は白、字は太白と申します。白鶴に乗って天に昇る夢を見たことがございます。私は俗世に関わる者ではありませぬ。

《仙呂》【點絳唇】鶴夢翱翔。坦然獨向△蓬山上。引九曲滄浪。助我杯中況。

〔校〕なし。

〔注〕〇翶翔……「離騷」に「鳳皇翼其承旂兮、高翶翔之翼翼（鳳凰はうやうやしく旗をささげ、高くなごやかに舞う）」とあるように、空を飛ぶ・遊び回るといった意味で文言では頻用される語彙。〇向蓬山……李白「贈僧崖公」詩に「何日更攜手、乘杯向蓬瀛（いつまた手を取り合って、杯にのって蓬莱瀛洲の神山に向かうことができよう）」と見える。〇九曲滄浪……「九曲」は通常は黄河のたとえであるが、元の黄鎮成の「題逹可大監遊武夷巻」詩（『秋聲集』巻二）に「上有七層欝羅級、下有九曲滄浪灣。仙人騎鶴互來往、但聞雜佩聲珊珊（上には七層の高くそびえる塔、下には九曲がりにくねる川の流れ。仙人は鶴に乗って行き来し、耳にはいるのはかちかちとさげもののふれあう音）」という句が見え、「仙人騎鶴」というこの曲と似通った言葉が見える点が注意される。また、白居易の「春池閒汎」詩に「莫唱滄浪曲、無塵可濯纓（滄浪の曲を唱いたもうな、洗おうにも冠のひもに汚れなどありはせぬ）」とあるように、「滄浪曲」は『楚辭』「漁父」に見える漁父の歌「滄浪之水清兮、可以濯吾纓。滄浪之水濁兮、可以濯吾足（滄

浪の水が澄めば、私の冠のひもを洗うことができる。滄浪の水が濁れば、私の足を洗うことができる)」をさすことがある。あるいはここでは掛けて用いているのかもしれない。

〔訳〕鶴に乗る夢に天を翔け、ゆったりと一人蓬莱山の頂きに向かう。まがりくねった青い流れを引き寄せて、わが酒興をいよいよ増してくれよう。

【混江龍】忽地眼皮開放。似一竿風外酒旗忙。不向竹溪翠影、決戀着花市清香。我舞袖拂開三島路、醉魂飛上五云(雲)鄉。甘心致仕、自願歸休、毆陽浩氣、澆灌吟懷、不求名、不求利、雖不一單(簞)食、一瓢飲、我比顔回隱跡只爭个无深巷。嘆人生碌二(碌)、羡塵世蒼又(蒼)。

〔校〕○忽地……詞本は「忽的」とする。○似……詞本にこの語なし。○決戀着……詞本は「偏戀」とする。○我……詞本にこの語なし。○五云鄉……鄭本は「五雲鄉」に改める(徐・寧本は簡体字のため原本に同じ)。○毆陽浩氣……詞本は「浩然眞氣」とする。鄭本は不明とし、徐本は「掀揚浩氣」、寧本は「頤養浩氣」に改める。○雖不……詞本にこの語なし。○个……詞本にこの語なし。○一單食……各本とも「一簞食」に改める。○蒼又……詞本は「茫茫」とする。

〔注〕○一竿風外酒旗忙……陸龜蒙「奉訓襲美先輩吳中苦雨一百韻」詩に「酒幟風外欹、茶槍露中擷(酒屋ののぼりは風のかなたに垂れ、茶の芽を露の中に摘む)」とあり、おそらくこれを踏まえて金の劉昂の「即事」二首の二(『中州集』巻四)に「山花山雨相兼落、溪水溪雲一樣閒。野店無人問春事、酒旗風外鳥關關(山中に雨と花はともどもに落ち、谷の川と雲はともにのどか。田舎の宿に春を訪ねる人とてないまま、酒旗そよがす風のかなたに鳥の声)」という句があって、人口に膾炙していたらしい。次句の「溪」はこの詩を承けている可能性がある。○竹溪……李白が隱遁した場所の名が用いられている。『舊唐書』巻一百九十下「文苑下」「李白、字太白。……少與魯中諸生孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔等隱於徂徠山、酣歌縱酒、時號竹溪六逸(李白、字は太白。……若い頃魯の若手知識人孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔と徂徠山に隱遁し、大酒飲んでは盛り上がって唱っていたので、当時の人は竹溪六逸と呼んだ)」。○決戀……他に用例のない語である。詞本の「偏戀」同様、恋着する意味には違いないであろう。「流戀」の誤りか。○花市清香……「花市」は花市場のことだが、ここでは妓楼もしくは花街のことと思われる。商衜【月照庭】套「問花」の【喜春來】に「清香引客眠花市。艷色迷人殢酒巵(清らかな香は客を引き寄せて花市場で眠らせ、あでやかな色は人を迷わせて酒杯から離れがたくさせる)」というのは、花に掛けて実は妓楼のことをうたった例である。○舞袖拂開……李白「醉後贈王歷陽」詩に「筆蹤起龍虎、舞袖拂雲霄(筆跡からは龍虎が立ち上がり、袖を舞わせれば天を払う)」とある。○三島路・五雲鄉……唐の廖融「夢仙謠」詩に「翠鳳引遊三島路、赤龍齊駕五雲車(翠の鳳が仙界三島への案内に立ち、赤い龍が一斉に五雲の車を引く)という句があり、『詩話總龜』などにも見えてかなり有名な詩であったらしい。あるいはこれを踏まえるか。○毆陽……未詳。「浩氣」の意味からすると寧本のような語が来るべきではあるが、確かなことはいえない。あるいは「毆」は「甌(酒がめ)」

の誤りかとも思われるが、よくわからない。仮に寧本の方向で訳す。

○吟懐……うたごころといった意味。早い用例としては杜荀鶴「近試投所知」詩の「白髪随梳落、吟懐説向誰（白髪は梳くたびに落ち、うたおうとする思いを誰に語ろう）」があり、宋以降広く用いられる語である。○一箪（簞）食、一瓢飲……『論語』「雍也」の「子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其樂。賢哉回也（先生がいわれた。顔回はなんとすばらしいことか。わりご一つの食べ物、杓子一杯の飲み物ばかりで、貧民街に住んでいる。他人ならつらくてたまらないであろうに、顔回はいつも楽しそうにしている。顔回はなんとすばらしいことか）」に基づく。「胡蝶夢」（古名家本）第一折【醉中天】に「咱毎日一瓢飲、一簞食。有幾雙箸、幾張匙（私たちは毎日杓子一杯の飲み物とわりご一つの食べ物があるばかり。何膳の箸、何本のさじがあるというの）」というように、元曲ではよく用いられる語である。ほとんど典故を踏まえないような雑劇でも、『論語』は常に典故として引かれており、やはり初等教育におけるテキストとして広く用いられていたことがうかがわれる。○人生碌碌……宋の張詠の「徧箴」に「人生碌碌、人心反覆（人の生活はせかせか、人の心は変わりやすい）」とあり、成語かと思われる。○羨……おそらく「嘆羨」という語を二つに分けたものと思われる。しかし「嘆羨」でもやはり羨むという方向で用いられるのが常であり、ここで文脈上推定される「嘆く」という方向にはなりにくい。他にこの二字を併用した事例としては、査德卿の散曲【寄生草】「感嘆」の「羨傅説守定巖前版。嘆靈輒喫了桑間飯。勸豫讓吐出喉中炭。如今凌煙閣一層一箇鬼門關、長安道一歩一箇連雲棧（傅説がじっと岩の前で工事をしていたことがうらやましい、靈輒が桑畑でもらったものを食べてしまったことは嘆かわしい、豫譲には喉の中の炭など吐き出しなされと申し上げたい。今となっては功臣讃える凌煙閣は一層が一つの冥土への道、長安への道は一歩が一つの雲に連なる危ういかけはし）」がある。これと同じ文脈だとすれば、あるいは「人生などつまらぬものゆえ、いっそ俗世にまみれるがまし」ということになるのかもしれない。徐校はあるいは「笑」の誤りかとする。

〔訳〕やにわにまぶたを開ければ、風のかなたに飲み屋ののぼりが一本せわしなくはためいているよう。さては竹茂る谷川のみどりなす木陰にいたのではなく、花街にて美女の香りに恋着していたのであったか。わしは袖を舞わせて東海なる三仙島へ道を開き、酔うた魂を五雲の仙郷まで飛ばしてくれよう。致仕も結構、引退は大歓迎、浩然の気を養って（?）、うたごころを育て、名も求めず、利も求めず、わりご一つの飯に、杓子一杯の飲み物というわけではないけれど、顔回の隠遁とは、陋巷におらぬことよりほかには違いもありはせぬ。嘆かわしきは人の一生のせわしなきこと、いっそ俗世が慕わしい（?）。

〔校〕なし。

〔見駕了〕〔云了〕小生却則酒肆之中。飲了幾杯。

〔注〕○云了……動作の主体はおそらく駕、つまり玄宗であろう。ここで飲み屋から宮中に着くのか。次のセリフは正末のものである。本劇においては、正末の白しか記録されていない。

〔訳〕［駕に会う］［（駕）いう］私、飲み屋で一杯やっていただけでございますよ。

【油葫蘆】常是不記蒙恩出建章。身踉蹌。把一領錦宮袍常惹御爐香。臣覷得緑樽一點蒲萄（萄）醸。似禹門三月桃花浪。記當日設早朝、没揣的見帝王。覺來時都汗尽江湖量。急卒着甚的潤枯腸。

〔校〕○常是……詞本にこの語なし。○緑樽……詞本と徐・寧本は「緑尊」とする。○蒲萄……詞・寧本は「葡萄」、鄭・徐本は「蒲萄」に改める。○都汗尽……詞本は「乾殺」、鄭本は不明とし、徐・寧本は「都干尽」に改める。○急卒着……詞本は「憑」とする。

〔注〕○出建章……建章宮は漢の武帝が建てた宮殿。後世も多く皇宮を象徴する単語として用いられ、王維の「奉和聖製十五夜燃燈繼以酺宴應制」に「魚鑰通翔鳳、龍輿出建章（魚をかたどる鍵は翔鳳閣へと通じ、龍を飾るみかどの輿は建章宮より出る）」と見えるが、ここでは唐の李嶷の「少年行」三首之一に「馳道春風起、陪游出建章（天子のお成り道に春風が立ち、お出ましのお供として建章宮を出る）」、劉禹錫「朗州竇員外見示與澧州元郎中郡齋贈答長句二篇因而繼和」に「鴛鷺差池出建章、綵旗朱戸蔚相望（高官がぞろぞろと建章宮から出てくる、色とりどりの旗と朱の戸のそのあたりをはるかに望む）」とあるように、皇帝の寵愛を受けた官僚が宮殿から出てくることであろう。元曲でも、「傷梅香」（息機子本）第三折【青山口】に「宴罷瓊林出建章（合格祝賀の宴を終えて建章宮から出てくれば）」というように、天子の恩寵を受ける意味で用いられる。○錦宮袍……「宮錦袍」と同じであろう。李白が「宮錦袍」を身につけていたことは、『舊唐書』巻一九二下「文苑傳下」に「嘗月夜乘舟自采石達金陵、白衣宮錦袍、於舟中顧瞻笑傲、傍若無人（月夜に舟に乗って采石から金陵まで行ったことがあった。白い衣に「宮錦袍」で、舟の中を眺め回しつつ傲然と笑い、傍若無人の有様であった）」と見え、以後采石と李白にまつわる語として頻用される。○惹御爐香……賈至「早朝大明宮呈兩省僚友」詩に「千條弱柳垂青瑣、百囀流鶯繞建章。劍佩聲隨玉墀歩、衣冠身惹御爐香（千本のなよやかな柳は宮門に垂れ、にぎやかにさえずる鶯は建章宮をめぐる。玉の階を歩む後を追うように剣とさげものは響き、衣冠正した身にはみかどの炉に焚く香のかおりを引く）」と、「建章」とあわせて用いられている。○禹門三月桃花浪……「禹門」は、黄河のいわゆる登龍門のこと。辛棄疾【鷓鴣天】詞「送范先之秋試」に「禹門已準桃花浪。月殿先收桂子香（禹門に桃花浮かべる波が立つことは決定済み、前もって月宮に木犀の香を手に入れているようなもの（両句とも科挙合格は確実の意）」とあり、また元代には黄公望の「王摩詰春溪捕魚圖」詩に「風雷昨夜過禹門、桃花浪暖魚龍長（風と雷が禹門を通ったことゆえ、桃花浮かべる波は暖かく魚龍も成長していよう）」と、表面的には魚取りをうたいつつ、裏に世俗の栄達の比喩をこめた句が見える。元曲においては、「紫雲庭」（元刊本）第四折【駐馬聽】の「則爲這情縁千尺藕糸（絲）長。誤盡禹門三月桃花浪（千尺の蓮の糸の如くに長い情のえにしゆえ、禹門三月桃花の波と試験に合格することもすっかりお留守になってしまった）」など、ここに見える七言句の形の用例が多い。おそらく辛・黄もこの成語を踏まえたの

であろう。○没揣的……突然、いわれもなく。「竹葉舟」（元刊本）第一折【鵲踏枝】「大羅仙没揣的過去。我下塵凡點化頑愚（この天界の仙人がにわかにやってまいったのは、俗世に下りて愚かな者に悟りを開かせるためじゃ）」。「灰欄記」（元曲選本）第二折【集賢賓】「這一場没揣的罪名除非天地表（かようないわれのない罪を晴らしてくれるのは天地よりほかにありはせぬ）」。○汗尽……よくわからないが、字形・意味から見て、徐・寧本が改める「干盡」である可能性が高いものと思われる。仮にその方向で訳すが、文字通り「汗が出尽くしていた」という意味である可能性もある。○江湖量……『録鬼簿』に付された賈仲明の吊詞のうち、李仲章に対するものに「江湖量。錦繡腸。也有無常（江湖の如き度量、錦繡の如き文才、それでも死は訪れるもの）」とあり、「貶黄州」（于小穀本）第一折【那吒令】にも「江湖量。錦繡腸。都分付水國江郷（江湖の如き度量、錦繡の如き文才、ことごとく水郷の国行きとはなった）」という句が見えることから、これで成語化していたものと思われる。度量、ひいては才能が豊かなことをいうようであるが、ここでは酒量もかけているか。○潤枯腸……宋の鄭剛中の「楊思恭惠酒作小詩戯之」詩に「炎炎酷暑日偏長、饞吻常思累百觴。封寄瓊醅雖甚美、一甕何以潤枯腸（めらめら酷暑の中日はむやみに長く、浅ましい口は百杯重ねたいと思ってばかり。お送りいただいた名酒はまことに結構ではありますが、一甕ではとても枯れたはらわた潤せませぬ）」とある。

〔訳〕ご恩を受けて皇宮から出てきたことなどいつも記憶にありはせぬ。よろよろしつつ、官服には皇帝さまの香炉の香りをいつもにおわせております。私から見れば、緑の樽にちっと入った葡萄の酒は、禹門三月桃花の浪とばかりに科挙に受かるよりまさるもの。思いかえせばむかし、朝の朝儀の折、突然皇帝さまにお会いしたこともございました。目覚めてみれば江湖の如きこの腹の中も枯れ果てておりました。とっさに何で乾いたはらわたを潤したものやら。

【天下樂】官里御手親調醒酒湯。聞香。不待嘗。量這筋頭酸怎揉我心上痒。不能勾瓮里蒭斗内量。那一回浮生空自忙。

〔駕云了〕陛下休小覷這酒。有幾般好処。

〔校〕○官里……詞本にこの語なし。○御手……詞本は「玉手」とする。○筋頭……徐本は「箸頭」、寧本は「筋頭」とする。後者は単なるミスと思われる。○我……詞本にこの語なし。

〔注〕○親調醒酒湯……前にも引いたように、欒史の「李翰林別集序」に「草和蕃書、思若懸河。帝嘉之、七寶方丈、賜食于前、御手調羹」とある。○浮生空自忙……「看錢奴」（息機子本）第二折の陳徳甫の登場詩「耕牛無宿草、倉鼠有餘糧。萬事分已定、浮生空自忙（耕牛には宵越しの草はないのに、倉の鼠にはありあまる穀物。万事運命の定めあり、浮世にせわしく働くのもむなしいこと）」など、主に登場詩に頻用される句である。明の陳全之の『蓬窗日録』巻七に「農家壁上四絶、意甚警策、或曰晦翁詩。鵲噪未爲吉、鴉鳴豈是凶。人間凶與吉、不在鳥音中。耕牛無宿草、倉鼠有餘糧。萬事分已定、浮生空自忙。……（農家の壁に四首の絶句が書かれており、その内容は警抜なものであった。一説に朱熹の詩だともいう。「鵲が騒いでも吉とは限らぬ、

カラスが鳴いても凶とは限らぬ。人の世の凶と吉は、鳥の声にはありはせぬ」……）」とあり、元明清を通じて広く知られた成語であったらしい。

〔訳〕陛下が御自ら酔い覚ましのスープを調味して下さったものの、香りをかぐばかりで、味わうまでもありませぬ。こんな箸の先ほどのけちくさい酸味では、わが心の中のかゆいところに手が届きませぬ。かめの中にてこし、升にて計るという飲み方でなくては、空しくせわしなき人生と申すもの。

〔駕いう（酒などつまらないという内容か）〕陛下、酒を軽く見てはなりませぬ。酒には幾つも長所がございます。

【那吒令】這酒曾散漫却、云（雲）烟浩蕩。這酒曾眇（渺）小了、風雷勢況。這酒曾混沌了、乾坤氣像（象）。想爲人百歳中、得運子有十年旺。待有多少時光。

〔駕云了〕

〔校〕○散漫却……詞本は「散浸了」とする。意味からいうと「漫」が適切かと思われるが、元刊本の字は「浸」「漫」「侵」のいずれにも読める字形であり、李開先は元刊本に基づいている可能性が高いものと思われる。○眇小……詞本は「渺視」とする。鄭・寧本は「渺小」に改める。○氣像……各本とも「氣象」に改める。詞本も同じ。○子有……詞本は「只」とする。○時光……詞本は「好時光」とする。

〔注〕○云烟浩蕩……少し後の例ではあるが、明初の張天師だった張宇初の「題方壺寶管雲烟圖歌」（『峴泉集』巻四）に「雲烟浩蕩窮滄溟、山浮羣樹清瀬遠（雲ともやはるかに青海原まで広がり、群れなす樹が山に浮かび清らかな流れははるか）」とあるように、隠遁と関わる語であろう。○風雷……「陳摶高臥」（元刊本）第二折【菩薩梁州】に「風雲不憶風雷信。琴鶴自有林泉分（風雲のもと風雷のたよりなど覚えてはおらぬ、琴や鶴は林泉のもとに隠れおるのが分相応）」とあるように、元曲では通常立身出世の意に用いられる。ここで意味するところは定かではないが、前の「雲烟」との対比から隠遁と出世ということか。○乾坤氣像……元の周權の「闕下遙瞻」三首之三（『此山集』巻八）に「野人親覩朝綱整、可是乾坤氣象新（野人の身で立派なまつりごとを目にしたが、これぞ天地の気も新たになったと申すもの）」とあるように、「氣象」と表記するのが普通である。「混沌了、乾坤氣像」というのは、「陳摶高臥」（古名家本）第三折の駕（趙匡胤）の白に「遇見陳摶先生、被他撥開混沌乾坤、指出太平天子（陳摶先生にお目にかかって、乱れた天地を切り開き、太平の天子と指していただいた）」という例から見ると、天下を滅茶苦茶にすることか。○人百歳……白居易「自誨」に「人生百歳七十稀（人の一生は百歳とはいうが、七十になる者は稀）」とあるのが元曲では最もよく引かれる。また次句との関係でいえば、陳著【念奴嬌】詞「端午酒邊」に「説道浮生饒百歳、能有時光多少（たとえ浮世は百歳までといおうと、どれほどの時があろうぞ）」という句があり、ここの表現に似る。

〔訳〕この酒は隠遁の思いを広げ、立身出世の望みを小さくし、天地をごちゃごちゃにいたしたことがございます。思えば人生百年の内、

思いにかなうのは十年間の盛んな間ばかり。どれほどの時がありましょう。

［駕いう（そんなでたらめな態度はやめろということか）］

【雀（鵲）踏枝】欲要臣不顛狂。不荒唐。咫尺舞破中原、禍起肖（蕭）墻。再整理乾坤紀綱。恁時節有个商量。

〔校〕〇雀踏枝……各本とも「鵲踏枝」に改める。〇肖墻……鄭本は詞本同様「蕭牆」、徐・寧本は「蕭墻」に改める。

〔注〕〇舞破中原……杜牧「過華清宮絶句」三首之三に「新豊綠樹起黄埃、數騎漁陽探使回。霓裳一曲千峰上、舞破中原始下來（新豊の緑の樹に黄色いほこりが舞い上がり、数騎の漁陽探る使者は帰る。霓裳の一曲をあまたの峰の上に奏で、舞ゆえに中原破れることとなってはじめて下りてこよう）」とあるのに基づく。つまりこの句は将来の予言となるものである。この劇においては、李白は未来を予知する能力があるものとされているように思われる。〇禍起蕭牆……蕭牆はいわゆる「照壁」、つまり門の内側に立てられた目隠しの壁のこと。『論語』「季氏」に「吾恐季孫之憂、不在顓臾、而在蕭牆之内也（私は、季孫の悩みの種は、顓臾の町などではなく、家の中にあるのではないかと心配する）」とあるのに基づくが、「禍起蕭牆」で成語化している。古くは蔡邕の作とされる（年代的に考えて実際には別人の作といわれる）「劉鎮南碑」に「俄而漢室大亂、禍起蕭牆、賊臣專政、豪雄虎争（突然漢王朝は大いに乱れ、身内から禍が起き、奸臣が政治を思うがままにし、群雄が激しく争うことになった）」と見えるが、ここに影響しているのは胡曾『詠史詩』「長城」の「祖舜宗堯自太平、秦皇何用苦蒼生。不知禍起蕭墻内、虚築防胡萬里城（堯舜のやり方に従えば自然と太平になろうものを、秦始皇はどうして民を苦しめることがあろう。禍が家の中から起ころうとは知るよしもなく、北の民を防ぐ万里の城壁築いたのもあだなこと）」であろう。

〔訳〕私に正気になれ、でたらめはやめろとお望みなら、目の前で舞ゆえに中原は破れ、家の中から災いが起きて、天下の決まりも一から出直しとなる、その時にご相談いたしましょう。

［駕云了］陛下道、微臣在長安市上、酒肆人家、土坑（炕）上便睡沙、那的是學士每好処。［做住了］

〔校〕〇土坑……徐本は「土炕」に改める。〇沙……徐・寧本は「吵」に改める。鄭本は「沙」のままで上の句に付ける。

〔注〕〇長安市上……杜甫「飲中八仙歌」に「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠（李白は一斗の酒で詩が百篇、長安の市の飲み屋で眠る）」とある。〇沙……鄭本が前の句に付けるのは、「沙」には「呵」と同様、前文が条件節であることを示す用法があることに由来するものであろう。徐・寧本は間投詞と取るのであろう。ここでは鄭本に従って訳しておく。

〔訳〕［駕いう］陛下は、わたくしめが長安の市なる飲み屋にて、オンドルの上で寝ているとおっしゃいますが、それが学士どもなどのいいことでございます。［しぐさをする］

【寄生草】休笑那通庁坑。闊矮床。臣便似玉仙高臥仙人掌。錦橙嫩擘銷金帳。便似醉鞭悞入平康巷。子這一席好酒百十□。抵多少五陵豪氣三千丈。

〔駕云了〕

〔校〕○通庁坑……詞本は「通鞓炕」、徐本は「通庁炕」とする。○臣便似……詞本にこの語なし。○玉仙……徐・寧本は「玉山」に改める。○錦橙……詞本は「金橙」とする。○便似……詞本にこの語なし。○百十□……最後の字は判読不能。詞本は「觴」とし、徐・寧本はこれに従う。鄭本は「巡」とする。

〔注〕○仙人掌……詩詞では漢の武帝が置いた金銅仙人の像の手をさすことが多いが、ここでは崔顥の「行經華陰」に「武帝祠前雲欲散、仙人掌上雨初晴（武帝の祠の前に雲は散ろうとし、仙人掌の上に雨は晴れたばかり）」とある華山の一峰の別名から転じて、深山の意味で用いている可能性が高い。「高臥」という語を用いているのも、華山に隠遁した陳摶との連想によるものであろう。「玉仙」を徐・寧本が「玉山」に改めるのは、一句の中に「仙」字が重複することと、『世説新語』「容止」に見える嵇康に関する「其醉也傀俄若玉山之將崩（酔うとぐらりと玉山が崩れようとするかのようである）」という記述が酔態の描写として有名であることに由来しよう。もとよりその可能性はあるが、次句も詞本では「金橙」となっており、「錦橙」は梅堯臣の詩に用例がある程度で、「金橙」の方が通常用いられる語である点から考えると、「金橙」が本来の形かもしれない。もしそうであれば、二句ともに意図的に同字を反復使用している可能性があろう。いずれにせよ断定は困難なので、とりあえず原本のままで解釈する。○錦橙嫩擘銷金帳……周邦彦の【少年游】詞の「幷刀如水、呉鹽勝雪、纖手破新橙。錦幄初溫、獸煙不斷、相對坐調笙（幷州のナイフは水のように輝き、呉の塩は雪にまさる白さ、ほっそりした手で新物のみかんを裂く。錦の帳の中は暖まったところ、獣かたどる香炉の煙は絶えることなく、向かい合って笙を吹く）」に基づくものであろう。○醉鞭悞入平康巷……柳永の【玉胡蝶】詞の「誤入平康小巷、畫簷深處、朱箔微褰（花街の路地に迷い込むと、模様を描いた軒の奥深く、朱色のすだれを軽く掲げ）」に基づくものと思われるが、「醉鞭悞入平康巷」の形で成語化していたらしく、「貶黄州」（于小穀本）第一折【油葫蘆】の「又不是醉鞭誤入平康巷。笙歌幾處聞、淨鞭三下響（酔って鞭を振りつつ色街に迷い込んだわけでもなし。あちこちから笙の楽の音響き、静粛告げる鞭は三たび響く）」など用例多数。また李白のことをうたった鮮于必仁【折桂令】「李翰林」に「醉吟詩誤入平康（酔って詩を吟じつつ色街に迷い込み）」の句が見える。○百十□……鄭本は「巡」を仮に補い、「回」でもよいが、響きが「猛」にすぎるとする。この句は必ずしも押韻しなくてもよいので、強いて「觴」とする必要もないが、一応詞本を尊重してその方向で訳す。○五陵豪氣三千丈……元曲ではよく用いられる句。『研究』二百七十七頁の注を参照。○駕云了……ここで外国の使節から手紙が来たことをいうのであろう。

〔訳〕ホールに通じるオンドルや、広くて丈の低いベッドのことをお笑いめさるな。わたくしからすれば仙人が山の中にのんびり横たわっ

ているような気分でございます。金の模様の入ったカーテンの中にて軟らかいミカンを裂くのは、酔って鞭を振りつつ色街に迷い込むようなもの。一度の酒席にて何十杯と重ねさえすれば、五陵の豪気五千丈などという勢力家の威風など何でもありませぬ。［玄宗がいう］

【么】舒開牋无皺、磨得墨有光。就霜毫寫出淩烟像。文場中立定中軍帳。就兵床拜起元戎將。那里是樽前悞草嚇蠻書、便是我醉中納了風魔狀。

〔校〕○文場中……徐・寧本は「中」を削る。○便是我……詞本にこの語なし。

〔注〕○墨有光……米芾『硯史』「玉硯」に「玉出光、爲硯著墨不滲、甚發墨有光。其云磨墨處不出光者非也（玉は光を放つ。硯にこしらえれば、墨をつけてもしみこまず、墨がよく磨れて光を帯びるものである。墨をすった場所は光を放たないというのは誤りである）」と見える。○文場……通常は科挙の試験の場を指すが、ここでは文筆の世界ということであろう。賈仲明が『錄鬼簿』に付した吊詞のうち、馬致遠を弔ったものに「戰文場、曲狀元（文筆の世界で戦い、曲の状元となった）」というのはそうした例である。○文場中……徐本は、同じ句の中にもう一つ「中」字があることを根拠に「中」を削るが、元刊本においては同字の反復使用はそれほど珍しいことではなく、無理に改める必要はないであろう。○兵床……他に用例がなく、よくわからない。仮に文字通り兵の寝床と取っておく。○風魔狀……汪元亨【朝天子】「歸隠」に「出皇家麟鳳網。慕夷齊首陽。嘆韓彭未央。早納紙風魔狀（みかどのもとなる麒麟鳳凰の網を出て、首陽山の伯夷叔斉を慕い、未央宮なる韓信・彭越の死を嘆き、とっとと「風魔狀」を差し出すとしよう）」とある。よくわからないが、頭がおかしくなったとして朝廷に辞職を願い出る書状のことか。

〔訳〕皺一つ無い紙を広げ、磨れば墨は輝きを帯びる。霜の如き白い筆にて淩烟閣なる功臣の姿を描き出し、文の戦場に主将のテントを張り、兵の寝床にて総大将に任命されようぞ（?）。酒樽の前にてうっかり蛮族をおどす手紙を書いてしまったなどというものではない、酔って狂った辞表を書いたというものでしたわ。

〔駕云了〕陛下問微臣直道（到）幾時不喫酒。

【六么序】何時靜、尽日狂。但行処酒債尋常。糶尽黄粮（粱）。典尽衣裳。知他在誰家里也琴劍書箱。這酒似長江後浪《催前浪》。洒哥（歌）樓醉墨琳琅。筆尖兒鼓角聲悲壯。驅雷霆號令、煥星斗文章。

〔校〕○黄粮……詞本は「黄粱」。各本もこれに従う。○長江後浪……各本ともあとに「催前浪」を補う。ただし詞本にはなし。

〔注〕○駕云了……おそらくいつになったら酒をやめるのかと問うのであろう。○但行処酒債尋常……杜甫の「曲江」二首之二「朝回日日典春衣、毎日江頭盡醉歸。酒債尋常行處有、人生七十古来稀（朝廷より帰って日ごとに春の衣を質に入れ、毎日曲江のほとりでとことん酔って帰る。いつも行く先々は酒の借りだらけだが、人と生まれて七十年生きられることは昔から少ないもの）」に基づく。次の「典尽衣裳」もこの詩に基づくものであろう。○糶盡黄粮（粱）……北宋の盧秉の「汴河驛中」詩（『珊瑚鉤詩話』巻二）に「青衫白髮病參軍、

旋羅黄粱置酒樽（下っ端役人の服をまとった白髪の病んだ参軍が、急いできびを売って酒樽を用意）」とあるのに基づくか。○長江後浪……ここは七字句が来るべきであり、「長江後浪催前浪」が成語として頻用されるので、諸本のように「催前浪」を補うべきであろう。宋の劉斧の『青瑣高議』前集巻七「孫氏記」に、「我聞古人之詩曰、長江後浪催前浪、浮世新人換舊人（孫氏はこう記している。「私が聞いた古人の詩にこうあった。『長江の後の波が前の波をせき立て、浮世では新しい人が旧い人にとってかわる』」）と見えるほか、南宋の釋文珦の「過苕溪」詩に「祇看後浪催前浪、當悟新人換舊人」とあり、「東窗事犯」（元刊本）第四折【滾繡毬】に「果然道長江後浪催前浪、今日立起新君換舊君（げにも「長江の後の波は前の波をせき立てる」というものにて、今日新たな君が立って旧い君にとってかわられた）」と見えるのをはじめとして、元曲の用例も多い。○酒歌樓……鄭谷の「雪中偶題」詩に「亂飄僧舍茶煙濕、密洒歌樓酒力微（僧房に乱れ舞って茶の煙も湿ったよう、歌響く妓楼にびっしり降りそそげば酒の力も弱まる）」と見えるのが名高く、柳永の【望遠行】詞「冬雪」に「亂飄僧舍、密洒歌樓」とこれを踏まえた句が見える。○鼓角聲悲壯……杜甫の「閣夜」詩に「五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖（夜明けの太鼓と角笛の響きは悲壮に、三峡に銀河の光がまたたく）」と見える。○驅雷霆號令、煥星斗文章……杜牧の「華清宮三十韻」に見える「雷霆驅號令、星斗煥文章（雷の如く命令を発し、星の如くに文化は輝く）」に基づく。この句は広く人口に膾炙し、『文獻通考』巻五十六に「隆興二年詔評事以八員爲額、以雷霆號令星斗文章爲號（隆興二年、詔により大理寺の評事の定員を八名と定め、「雷霆號令星斗文章」の八字を名称とした）」とあるように、非常に広く知られる成語となっていた。元雑劇でも「玉鏡臺」（古名家本）第一折【混江龍】に「萬里雷霆驅號令、一天星斗煥文章（万里のかなたまで雷の如くに命を出し、天に満ちる星の如く輝かしい文を書く）」と見えるのをはじめとして用例は多く、特に使者の登場詩としてしばしば用いられる。

〔訳〕［駕いう］陛下はそれがしにいつになれば酒をやめると問われますか。

いつになれば落ち着くやら、日がな一日狂ったようなありさま。行く先々に酒のつけ。キビは売り尽くし、服はすべて質屋行き、琴剣書箱はどこへやら。この酒は長江の波が後から後から押し寄せるように果てしなく、酔って筆を妓楼に揮えば詩のできばえすばらしく、筆先からほとばしるは太鼓と角笛の悲壮な響き。雷の如くに命を出し、詩文は天に満ちる星の如く輝かしく。

［駕云了］

【么】直等鑾王。見了吾皇。恁時節酒態軒昂。詩興飄揚。割捨了金鸞殿上。微臣待醉一場。紫綬金章。法酒肥羊。幾時填還徹這臭肉皮嚢。聖朝帝主合興旺。交這廝横枝兒泄（燮）理陰陽。肚嵐躭喫得惹來胖。沒些君臣義分、只有子母情腸。

〔校〕○金鸞殿……各本とも「金鑾殿」に改める。詞本も同じ。○臭肉皮嚢……詞本は「臭皮嚢」とする。○横枝兒……詞本は「横身軀」とする。○泄理陰陽……各本とも「燮理陰陽」に改める。詞本も同じ。

○肚嵐躭……詞本は「肚獼躭」とする。○惹來胖……詞本は「偌來胖」とし、寧本はこれに従う。

〔注〕○金鑾殿……通常は「金鑾殿」と表記されるが、唐の楊巨源の「張郎中段員外初直翰林報寄長句」詩に「丹鳳詞頭供二妙、金鸞殿角直三清（丹い鳳凰のくわえる詔にご両人のすぐれた才能を提供し、金鸞殿のすみ、三清殿にとのいする）」とあるように、「鸞」イメージが好まれるためか、「金鸞殿」と表記する例も多い。李白の「贈從弟南平太守之遙」二首之一に「承恩初入銀臺門、著書獨在金鑾殿（ご恩をこうむってはじめて銀臺門に入り、ただ一人金鑾殿で書を著した）」、樂史の「李翰林別集序」に、李白について「置于金鑾殿、出入翰林中、問以國政、潛草詔誥（金鑾殿に配置し、翰林に出入りすることとして、国政について諮問され、内密で詔勅を起草させられた）」とあり、沈括『夢溪筆談』巻一に「唐翰林院在禁中、乃人主燕居之所。玉堂・承明・金鑾殿皆在其間（唐の翰林院は禁中にあり、皇帝さまがくつろがれる場所であった。玉堂・承明・金鑾の諸殿はそこにあった）」と見えるように、翰林院が置かれている宮殿の名であったらしい。○紫綬金章……紫のひものついた銅の印。『晉書』巻二十四「職官志」に「文武官公皆假金章紫綬（文武の官を持った公にはみな金章紫綬を貸し与える）」とあるように、高官に与えられた。李白の「駕去温泉宮後贈楊山人」詩に、「王公大人借顔色、金章紫綬來相趨（王侯や貴人もいい顔をし、金章紫綬の高官も近づいてきたものだ）」とあり、元曲においても「霍光鬼諫」（元刊本）第一折【青哥兒】に「諒這厮生長在細米乾柴不漏房。便賜與紫綬金章（こやつ如きいい米乾いた薪に雨漏り知らずで育った者に、簡単に紫綬金章賜るとは）」など用例が多い。○法酒肥羊……上等の酒と肥えた羊。「看錢奴」（元刊本）第一折【混江龍】「倒能够肥羊法酒、異錦輕紗（ろくでもないやつらの方が）肥えた羊や上等の酒、珍しい錦や軽やかな紗を楽しめるとは）」など用例多数。○塡還……穴埋めして返す。「趙氏孤兒」（元刊本）第四折【堯民歌】「須臾。須臾。前生厮少負。今日塡還去（すぐさま、すぐさま、前世の借りを、今日返させてもらおうぞ）」など。○臭肉皮囊……肉体のこと。「陳摶高臥」（元刊本）第四折【水仙子】に「分付取臭肉皮囊（この肉体を渡そう）」と見える。○横枝兒……脇から出しゃばること。「陳摶高臥」（元刊本）第二折【烏夜啼】「索甚麼横枝兒治国安民（どうして横からしゃしゃり出て国を治めるの民を安んずるのとできましょう）」など。ここでは、自分のことの如くにいいながら、実は安祿山をさすのであろう。○泄理陰陽……『尚書』「周官」に「立太師・太傅・太保、茲惟三公、論道經邦、燮理陰陽（太師・太傅・太保を立てよ。これぞ三公、道を論じ国をただし、陰陽を整えるもの）」と見え、以後頻用される語ゆえ、各本のように「燮理」に改めるべきであろう。同じ元刊雑劇の中にも、「周公攝政」（元刊本）第二折【滿庭芳】に「畢公皐泄理的陰陽正雨順風調（畢公皐は陰陽正しく整えて気候を順調ならしめる）」と、やはり「泄理」と表記されている例がある。○嵐躭……徐校が指摘するように、陶穀『清異録』巻三に「諺曰、闌單帶、疊垜衫、肥人也覺岩岩。闌單、破裂也。疊垜、補衲蓋掩之多（諺に、「破れた帯に継ぎだらけの上着なら、太った人も痩せて見える」とある。「闌單」とは破れていること、「疊垜」とはつぎの多いことである）」と見える

例があり、多様な表記が行われていたようである。〇母子情……楊貴妃と安祿山が義母子関係を結んでいたことをさす。

〔訳〕［駕いう］蛮王のわが君にお目通りする、その時には酔って意気上がり、詩興も盛ん、思い切って宮殿の上にて、大いに酔っ払ってご覧に入れましょう。紫の綬と金の印、上等の酒に肥えた羊、いつになったらこのろくでもない皮袋を満たせるやら。聖の御代のみかどが栄えられるのもごもっとも、かような者にしゃしゃり出てまつりごととることお任せとは。腹もはち切れんばかりに食ってかように肥え、君臣の義はいささかもなく、ただあるは母子の情ばかり。

【金盞兒】遶一百二十行。三萬六千場。這酒似及時雨露從天降。寛洪海量△勝汪洋。臣那里燕鶯花月影、鷗鷺水云(雲)鄉。這里鳳凰歌舞地、竜虎戰爭場。

〔校〕〇水云鄉……詞本は「水雲鄉」とし、鄭本もこれに従う（徐・寧本は簡体字のため原本に同じ）。〇この句の後に、原本には三字分ほどの空きがあるが、詞本にはこの空きに当たる字はない。寧本は三字の空格とし、鄭本は「陛下」、徐本は「駕云了」を補う。

〔注〕〇一百二十行……各種の職業の総称。「看錢奴」（元刊本）第三折【逍遙樂】「見這不斷頭客旅經商。還口愿百二十行（この切れ目ない旅人に行商人、願ほどきに来たいろいろな商売の人々を見れば）」など。〇三萬六千場……李白「襄陽歌」に「百年三萬六千日、一日須傾三百杯（人生百年三万六千日、一日で三百杯は飲まねばならぬ）」と見え、これを受けて蘇軾の【滿庭芳】詞に「百年裏渾教是醉三萬六千場（人生百年の間、三万六千回いつも酔っていようぞ）」とあり、元曲にも「遇上皇」（元刊本）第一折【金盞兒】（原文は曲牌名を欠く）「怎能勾百年渾是醉、甚的是三萬六千場（どうして百年間いつも酔っていられよう、三万六千回などとんでもない）」などのこれを踏まえた表現が認められる。〇及時雨露……「及時雨」は、旱魃の際に降る雨のこと。『水滸傳』の宋江の綽号であることは周知の通りであるが、早く南宋の李彌遜の「赤松」詩（『筠谿集』巻十二）に「那知無心雲、解作及時雨（あにはあからんや無心の雲も、旱魃救う雨となることができるもの）」と見える。〇雨露從天降……時代は降るが、明初の金幼孜「贈南陽知縣李桓圭」詩（『金文靖集』巻四）に「新春雨露從天降。白日香烟滿袖生（新春に雨露の恵み天より降り、昼間に香の煙は袖一杯に）」と見え、当時の成語だったようである。「從天降」という表現は、「老生兒」（元刊本）第三折【鬼三台】「好事從天降。呆廝回頭望（よいことが天から降ってきて、うつけ者は振り返ってみるばかり）」、「介子推」（元刊本）第一折【天下樂】「臣子怕引得禍從天上來（それがしが心配するのは、天から災いが降ってくるようなことをひきおこすこと）」など、ことがらの善し悪しに限らず用いられるようである。〇寛洪海量……『研究』四十五頁の注参照。〇鷗鷺水云（雲）鄉……「鷗鷺」はかもめとさぎのことであるはずだが、通常は『列子』「黃帝」に見える海岸でかもめとたわむれた人の故事を踏まえて、「鷗鷺盟」で隠遁の約束を意味する。従って、ここではかもめと考えるべきか。「水雲鄉」は、通常は「雲水鄉」という形で水鄉地帯のこと、転じて隠遁する場を意味する。南宋の劉黻の「漁村晩照」詩（『蒙川遺稿』巻二）

に「自許同漁者、築廬雲水郷。利名倶是幻、鷗鷺亦相忘（漁師とともに、雲と水のさとに家を築くことを自分に約束した。名利はみな幻、かもめともども俗事は忘れ果てた）」と見えるのを踏まえるのかもしれない。

〔訳〕あまたの店々経巡って、人生百年三万六千回飲みまくる。この酒は乾きを救う雨露の天より降るようなもの。その豊かさは大海にも勝る。わたくしめのおります燕に鶯の如き美女と花にさす月のもとに遊び戯れる場こそ、わが身にはかもめを友とする隠遁の地。こちらは鳳凰の歌い舞う地にして、龍虎相争う戦争の場。

〔駕央末寫詞了〕

【酔扶歸】見娘二（娘）捧硯將人央。不如我看劍引盃長。生把个菱花鏡里粧。倣了个水墨觀音様。這孩兒從懷抱里看生見長。子一句道得他小鹿兒心頭撞。

〔校〕○央……詞本は「殃」とする。○看劍……詞本は「彈劍」とする。○子一句道得他……詞本は「道他是」とする。

〔注〕○娘娘……后妃のこと。ここでは楊貴妃を指す。宋の蔡絛の『鐵圍山叢談』巻一に「至謂母后、亦同臣庶家曰娘娘（皇太后のことを、庶民の家と同じように「娘娘」という）」と見え、後世まで一般に広く用いられている。「周公攝政」（元刊本）第三折の白の「太后娘〃不放微臣出朝（太后さまがわたくしを朝廷からおだしになりません）」などの例がある。○捧硯……『記纂淵海』巻四十九などに「摭遺」によるとして引く李白が華陰県でとらえられた際に書いた供述書という「曾令龍巾拭吐、御手調羹、貴妃捧硯、力士脱靴、天子門前尚容吾走馬、華陰縣裏不許我騎驢（以前には皇帝さまのハンカチでげろを拭いていただいたり、陛下御自らスープを調味していただいたり、貴妃様に硯を捧げていただいたり、力士どのに靴を脱がせていただいたりしたもの。天子の門前で馬を走らせることもお許しいただいていたものを、華陰県では驢馬に乗ることも許さぬか）」に基づく語であろう。このことは『唐才子傳』などにも見え、後には『佩文韻府』などにも取られて広く知られる。『天寶遺事諸宮調』にもこのことをうたった套数があり、「楊妃捧硯」と通称される（以下同書の引用箇所表記は通称による）。○看劍引盃長……徐本が述べるように、杜甫の「夜宴左氏荘」詩の「檢書燒燭短、看劍引盃長（書物を調べるうち燭は短くなり、剣を見つつ悠然と杯を口に運ぶ）」に基づく。従って詞本の「彈劍」は不適切。○菱花鏡里粧……「菱花鏡」は菱の花の形をした鏡だが、鏡一般をもさす。宋の穆修の「合歡芍藥」詩（『穆參軍集』巻上）に「油壁車中同載女、菱花鑑裏並妝人（油壁の車にともに乗っていた女、菱の鏡の中でともに化粧した人）」とあり、異本では「菱花鏡裏並妝人」となっていることから考えて、この詩を踏まえている可能性がある。○看生見長……生まれた時から成長を見守ってきたこと。「灰欄記」（元曲選本）第一折【賺煞】「怎瞞得過看生見長的街坊（生長を見守ってこられた近所の衆をどうしてごまかせましょう）」など。○小鹿兒心頭撞……小鹿が心臓に突き当たる。どきどきすること。「紫雲庭」（元刊本）第四折【雁兒落】「越交妾小鹿兒心頭撞（いよいよ私の心はどきどき）」。なお、【金盞兒】に見えるように安祿山は鹿にたとえられ

ており、この句もそのニュアンスを含んでいるのかもしれない。

〔訳〕［玄宗、末に詞を書くよう頼む］見れば楊貴妃さまは硯を捧げて頼んでこられるが、剣をめでつつ悠然と盃を口にはこぶほうがよい。菱花の鏡を手にとり化粧をなさいましたが、硯手に持ち水墨の観音様になってしまわれましたな。この子を胸に抱きしめて生長見守ってこられましたが。ただ一言にて奴の心臓どきどきと、はねる小鹿に突き当たられた体たらく。

【金盞兒】子管里開宴出紅庄（粧）。咫尺想像賦高唐。瑞云（雲）重遶金鷄帳。麝煙濃噴洗兒湯。不爭玉樓巢翡翠、便是錦屋閉鸞凰。如今宮牆圍野鹿、却是金殿鎖夗（鴛）央（鴦）。

〔校〕〇子管里……詞本は「只管里」とする。〇紅庄……各本とも「紅粧」に改める。〇不爭・便是……詞本はこれらの語をともに欠く。〇錦屋……徐本は「錦幄」、寧本は詞本に従って「金屋」に改める。〇如今・却是……詞本はこれらの語をともに欠く。

〔注〕〇開宴出紅粧・想像賦高唐……ともに蘇軾の【滿庭芳】「佳人」詞に見える句。「香靉雕盤、寒生氷筯、畫堂別是風光。主人情重、開宴出紅妝。……報道金釵墜也、十指露、春筍纖長。親曾見、全勝宋玉、想像賦高唐（香りは模様のある大皿にたちこめ、氷の箸から寒さは生じるが、立派な部屋のありさまは格別。ご主人はもてなしの気持ち深く、宴開いて紅の化粧した美女を出された。……金のかんざしが落ちましたよとしらせれば、あらわれた十本の指、さながらに春の若タケノコにも似て細く長く。この目で見たからには、宋玉の、想像のみで「高唐賦」を詠んだことにはまさろうぞ）」。後世、これは王安石の屋敷で王安石夫人が姿を見せたことをからかった詞であり、その復讐のため蘇軾は黄州に流されたとする伝説が生まれた。『錄鬼簿』に題名のみを伝える趙善慶の雑劇「醉寫滿庭芳」は、おそらくこの話を扱っていたものと思われ、現存する「赤壁賦」第一折では詳しくこのことが演じられている。それゆえ、曲にもこれらの句を踏まえた表現は多い。「單刀會」（元刊本）第三折【石榴花】「休想道畫堂。別是風光。……休想肯開宴出紅妝（画堂の風光はまた格別、などと思うでない。……宴が開けば美女が侍る、などとは滅相もない）」。「高唐賦」はいうまでもなく神女との情交を描いた宋玉のエロティックな作品のことであり、ここでは安祿山と楊貴妃の密通のことを遠回しにいっているものと思われる。〇洗兒湯……新生児誕生後三日あるいは満月の日に赤子を入浴させる習慣。唐の姚汝能の『安祿山事迹』巻上に「後三日、召祿山入内、貴妃以繡綳子綳祿山、令内人以綵輿舁之、歡呼動地。玄宗使人問之、報云、貴妃與祿山作三日洗兒、洗了又綳祿山、是以歡笑。玄宗就觀之、大悅、因加賞賜貴妃洗兒金銀錢物、極樂而罷。自是宮中皆呼祿山爲祿兒、不禁出入（その後三日して、祿山を後宮に召し寄せた。貴妃は刺繡をしたおくるみで祿山をくるみ、女官に命じて飾りをつけた輿で担がせ、歓呼の声は地を揺るがさんばかりであった。玄宗が人をやって問わせたところ、「貴妃様が祿山と三日目の洗兒をしておられます。洗ってから祿山をくるんだので、みなで笑い騒いでいるのです」とのことであった。玄宗は見に行くと、大喜びして、貴妃に褒美として「洗兒金銀錢物」を賜った。以後、宮中では祿山を祿兒と呼び、

出入りを禁止しなくなった)」とある。〇野鹿……『青瑣高議』前集巻六「驪山記」に、玄宗が大切にしていた牡丹が鹿に取られたことを述べ、「一日、宮妃奏帝云、花已爲鹿銜去、逐出宮牆不見。帝甚驚訝謂、宮牆甚高、鹿何由入。……帝亦私謂侍臣曰、野鹿遊宮中非佳兆。翁笑曰、殊不知祿山遊深宮、此其應也（ある日、宮妃が帝に上奏して申しますには、「鹿が花をくわえて行ってしまいましたので、宮の塀から追い出したらどこに行ったかわからなくなりました」。帝は大変驚きいぶかっていわれました。「宮の塀はとても高いのに、鹿はどこから入ってきたのだ」。……帝はまた近臣にこっそり「野鹿が宮中に遊ぶというのは吉兆とはいえんな」とおっしゃいました。〔そこで語り手の〕老人は笑って、「祿山が宮中深くに遊んでいたことをまるでご存じなかったわけです。これはその応験ですのにね）」とあることによる。張可久の【漢東山】に楊貴妃のことをうたって「霓裳舞月娥。野鹿起干戈（霓裳の楽に月中の美女が舞い、野の鹿がいくさを引き起こす）」と見え、元の張翥の「題李白観泉圖」（『蛻菴集』巻一）にも「阿瞞荒宴百不理、寧記宮花銜野鹿。何物老嫗生此兒、偸向金鷄帳中宿（曹操の如きお人のでたらめな宴会など相手にせずにおったのだが、何と野生の鹿が宮中の花をくわえていこうとは。どこの婆がこんな餓鬼を生んだのやら、こっそり金鶏の帳の中に宿りおった）」と、前に見えた「金鶏帳」とともにこの語が用いられている。この詩は『草堂雅集』にも収められていることから見て、当時よく知られていたものと思われる。あるいは全体にこの詩を踏まえているか。〇玉樓巢翡翠・金殿鎖鴛鴦……李白の「宮中行楽詞」八首の其二に「玉樓巣翡翠。金殿鎖鴛鴦」とあるのに基づく。『天寶遺事諸宮調』の「貶祿山漁陽」【勝葫蘆】にも「則爲我金殿宿鴛鴦」とやはりこの詩を踏まえた表現が見える。〇錦屋……元の王德璉の「香奩八詠　金錢卜歡」（『元詩體要』巻八）に「錦屋瓊樓、薄情飄性（錦の家に玉の楼、気まぐれな薄情者）」と見えるほか、複数の用例があり、「金屋」に改める必要はないであろう。

〔訳〕ひたすら宴を開き美女を繰り出すさまを見れば、すぐ目の前におりながら「高唐の賦」のことを想像してしまう。めでたき雲は金鶏の帳を幾重にも巡り、麝香の煙は赤子を洗う湯に深く漂う中、困ったことに玉楼にカワセミが巣を作るとなれば、錦の部屋には鸞凰（皇帝と妃）が閉ざされることとなろうものを、いまでは宮中に野鹿を囲い込んで、金殿に鴛鴦を閉じこめるかの如くに連れ添わせておるわ。

〔正末做脱靴科〕力士、你休小覰此物。

【后庭花】這靴曾朝踏輦路霜。暮登天子堂。軟趁殘紅片、輕沾落絮香。我若沾（站）危邦。這的是脱身小樣。不合將足下央。

〔校〕〇沾危邦……徐・寧本は詞本に従って「站危邦」とする。〇這的是……詞本は「這的」とする。〇央……詞本は「殃」とする。

〔注〕〇暮登天子堂……『神童詩』「勸學」に「朝爲田舍郎。暮登天子堂（朝は百姓家の兄ちゃんだったものが、夕方には天子さまの御殿にあがる）」とあるのに基づく。〇輕沾落絮香……金の李俊民の「一字百題示商君祥」と題する五言絶句連作の「蜂」（『荘靖集』巻三）に「弄晴沾落絮。帶雨護園花（晴れた日に戯れるように散りゆく柳の糸にまつわり、雨を受けつつ庭の花を守る）」とあるのを踏まえるか。〇沾

危邦……『論語』「泰伯」に「危邦不入、亂邦不居（危うい国には入らず、乱れた国には腰をすえず）とあるのを踏まえるが、李白「比干碑」に「故能獨立危邦。横抗興運（それゆえ危うい国に一人立ち、上げ潮の運に乗る相手に抗った）」と見え、直接にはこれに基づくのではないかと思われる。とすれば、詞本のように「站」とするのが適当であろう。○小様……薩都剌の「上京即事」詩（『雁門集』巻三）に「中官作隊道宮車、小様紅靴踏軟沙（宦官が列を作って宮中の車を導き、小さな赤い靴が柔らかい砂を踏む）」と見えるのは、この曲と通うものがある。何らかの関係があるか。

〔訳〕［正末、靴を脱ぐしぐさ］　力士どの、これを軽く見てはなるまいぞ。

この靴は、朝には天子の御車通る道の霜を踏み、夕べは天子の御殿に登ったもの。そっと散りゆく花びらを追い、うっすらと落ちゆく柳絮の香りを染み込ませておる。わたしがもし危うい国に立つとなれば、これこそ小さいとはいえ身を脱するすべとなるもの、そこもとを煩わせはせぬ。

［末出朝科］

【尾】那廝主置定亂宮心、醞釀着謾天謊。倚仗着強耶（爺）壯娘。全不雇（顧）白玉堦頭納表章。子信着被窩兒里頓首城（誠）隍（惶）。我遶着利名場△佯做个風狂。指點銀瓶索酒噹。伿交讒臣毎數量。至尊把我屈央。休想楚三閭肯跳泪（汨）羅江。［下］

〔校〕○尾……鄭・徐・寧本は「賺煞」に改める。○強耶……詞本は「強爺」。徐・寧本はこれに従う。○雇……各本とも「顧」に改める。○子信着……詞本は「只信着」とする。○城隍……詞本は「誠惶」。各本ともこれに従う。○噹……各本とも「嘗」とする。○伿交……詞本は「儘教」とする。○屈央……詞本は「屈殃」とする。○泪羅……各本とも「汨羅」に改める。

〔注〕○主置……他に用例がなくよく分からないが、後に「亂宮心」とあることから考えて、心を決めることか。○謾天謊……天をあなどるでたらめということ。『西廂記』（弘治本）巻四第一折（実際には楔子に該当）の【端正好】に「着一片志誠心蓋抹了漫天謊（真心でとんだでたらめおおいかくし）」などの例がある。「謾天」については、宋の鄭俠「上皇帝論新法進流民圖」（『西塘集』巻一）に「十日不雨、即乞斬臣宣德門外、以正欺君謾天之罪（十日間雨が降らなければ、私めを宣徳門の外で斬って、君を欺き天をあなどった罪を正してください）」など、文言でも用いられることがあるようである。○強爺壯娘……玄宗と楊貴妃のことであろう。○白玉堦……『漢書』巻九十七下「外戚傳」に趙昭儀（飛燕の妹）の宮殿の豪華さを述べて、「切皆銅沓冒黄金塗、白玉階（しきいはみな銅をかぶせて黄金を塗り、白玉の階）」と見える。ここでは単に皇帝の宮殿の階段をいうのだが、李白が楊貴妃を趙飛燕にたとえたと讒言されたことを考えると、意図的にこの語を用いている可能性も考えられる。○被窩兒……掛け布団のこと。「調風月」（元刊本）第三折【尾】「閃得我薄設設被窩兒里冷（捨てられて薄い掛け布団の中で寒い思い）」など。○頓首城隍……諸本のように「頓首誠惶」と改めるべきであろう。土下座して恐れ入ることで、顧況の「進

高祖受命造唐賦表」が「臣況誠惶頓首、頓首謹言」と結ぶように、臣下が恐れ入る表現として一般的に用いられる。元雑劇の例としては、「麗春堂」（古名家本）【古都白】の「願陛下聖壽無疆。頓首誠惶」があり、『盛世新聲』が引く同じ曲ではやはり「誠惶」が「城隍」と表記されているのは興味深い。○利名場……歐陽修の【鶴冲天】詞に「勸君看取利名場。今古夢茫茫（名利の世界を看破なさい。古今のすべては茫々たる夢）」とあるのが知られている。「任風子」（元刊本）第三折【粉蝶兒】「若不是參透玄機。利名場、風波海、虚擔一世（もし悟りを開かなかったなら、名利の世界、波風の海で、一生むなしく重荷を負うていたところ）」など。○指點銀瓶索酒嚐……杜甫の「少年行」に「不通姓字麤豪甚。指點銀瓶索酒嘗（姓名も名乗らずひどく大きな態度で、銀の瓶を指して酒を飲ませろと求める）」というのに基づく。なお、各本は「嘗」に改めるが、「嚐」と「嘗」は同義の通用字であり、特に改める必要はないであろう。○數量……「玉壺春」（息機子本）第二折【隨煞尾】に「不是我冷氣虚心斷數量。則要你玉骨氷肌自主張（私は冷たい気持ちで責めるのではなく、あなたに玉の体をしっかり守ってほしいのだ）」とある例から見て、数え上げて非難するということか。○屈央……よくわからない。詞本のように「殃」とすれば「とんだ災いをもたらす」ということになるが、とりあえず「無理に頼む」という方向で訳しておく。○楚三閭……屈原のこと。楚の三閭大夫であったことによる。范蠡などとの対比のもとに、屈原を俗世を離れえずに非業の最期を遂げた者としてうたう例は元曲には多い。「范張雞黍」（息機子本による。元刊本ではこの部分は欠葉。なお白は省略する）第三折【牧羊關】に「赤松嶺張子房迷了歸路、洞庭湖范蠡爛了椿橛。首陽山殷伯夷撐的肥胖、汨羅江楚三閭黒婁婁昧的醉也（赤松嶺で張良は帰ろうとして道に迷い、洞庭湖で范蠡は船をつなぐ杭を腐らせ、首陽山で殷の伯夷は太った腹を抱え、汨羅江で楚の屈原はグーグーと酔いつぶれる）」とあるのはそのパロディである。

〔訳〕［末、朝廷を出るしぐさ］やつは宮中を乱す心を定め、天をも欺くとんだでたらめでっちあげ、強い父母頼りとして、白玉の階にて上表ささげることなど思いもせぬ。みかどは布団の中でかしこまってみせていることばかりを信頼される。わが身は名利の場を避け、頭おかしいふりをして、銀の徳利を指さしては酒を飲むとしよう。讒臣どもがあれこれいおうと、陛下がむりやり召されようとままよ、楚の三閭大夫屈原が汨羅江に身投げしたようにはなるまいぞ。

［退場］

《第二折》

［駕云］［外末進宝了］［駕旦外一行了］［外做宣末科］［正末扮上了］［引僕童上了］

海。對着此景、却不快活。［做交小童斷（斟）酒□］小童。此処无事、你自廻去。如是朝治里官人毎、你道我在這里。［僕童下］［末做住］

〔校〕○一行……徐・寧本は「一折」に改める。○海……徐・寧本は「晦」に改める。○斷……各本とも「斟」に改める。○□……原本では「丁」のような小さな字もしくは記号が見える。鄭・寧本は「了」と読み、徐本は「科」に改める。○朝治……徐本は「朝野」に改める。

〔注〕○外末進宝了……前後から見て外末は高力士か。「進宝」については不明。徐本は「嚇蠻書」に対する褒賞と関わるかと見る。○一行……元刊のト書きで「一行」が用いられる例は多いが、このままでは動詞が欠けているので、徐・寧本は「一折」に改めているのであろう。その可能性も否定できないが、元刊本のト書きには文法的に不完全な例が多く、ここも「一行上了」を省略した表現なのかもしれない。仮にその方向で訳しておく。○朝治……元来は朝廷と民間のことだが、元曲では朝廷の意味で用いられる。本来「朝野」が正しい表記だが、「遇上皇」（元刊本）第四折【折桂令】「朝治裏誰人似俺。惟懵懂愚痴憨（朝廷の中にわしのようにたわけたものはおるまい）」など、元刊本では「朝治」と書かれる例が多く、「野」が原義を失っていることから考えて、この表記が定着していたものと思われる。

〔訳〕［駕がいう］［外末、宝を献上する］［駕・旦・外の一行登場（？）］［外、末を召す］［正末扮装して登場］［召使の小童を連れて登場］ああ、この光景にむかえば、なんと楽しいことよ。［小童に酒をつがせる］これ、ここでは用はないゆえ帰るがよい。もし朝廷の殿様がたであれば、わしはここだといえ。［召使の小童退場］［末しぐさ。住］

【《正宮》端正好】滿長安、花无数。霎時間暮景桑榆。偏得你罪（醉）鄉中閉塞定賢門路。偏俺不合殢樽中物。

〔校〕○罪鄉……各本とも「醉鄉」に改める。

〔注〕○滿長安……賈島の「憶江上吳處士」詩の「秋風吹渭水、落葉滿長安（秋風が渭水に吹き、落葉が長安に満ちる）」が古来名句として知られる。これを踏まえるか。○花无数……用例の多い語だが、歐陽修の「鶴沖天」詞に「花無數、愁無數、花好却愁春去。戴花持酒祝、東風千萬莫匆匆（花も数知れず、愁いも数知れず、花がすばらしいほど春の去るのが心配になる。花をかずき酒を持って祈ろう、東風よくれぐれもあわただしく吹かないでくれ）」とあるのを踏まえるか。○暮景桑榆……夕日が桑や楡の梢に射すということから、晩年をいう定型表現。この二語を併用した古い例としては、『文選』巻三十一に見える劉宋の劉鑠「擬行行重行行」詩の「願垂薄暮景、照妾桑榆時（願わくは夕暮れの光なりともくださって、年を取ってしまった私を照らしてください）」がある。○罪鄉中閉塞定賢門……「罪鄉」は、各本が改める通り「醉鄉」の誤りであろう。「閉塞賢門」は詩文では用いられないようだが、「周公攝政」（元刊本）第三折【金蕉葉】に「末不誰把賢門閉塞。爲甚把鸞輿咫尺（指斥）（賢人登用する道をふさいだものがいるわけでもあるまいに、なにゆえみかどの悪口を申す）」など、元曲には用例が多い語である。なお「賢」は、『三国志』魏書巻二十七「徐邈傳」に「渡遼將軍鮮于輔進曰、平日醉客謂酒淸者爲聖人、濁者爲賢人（渡遼将軍鮮于輔が進み出ていうには、「普段から酒飲みは酒の清んだものを聖人、濁ったものを賢人と呼んでおります）」とあるように、酒の隠語として用いられることがあり、ここもそれを意識しているのかもしれない。○樽中物……酒のこと。韋應物の「郊居言志」詩に「但要樽中物、餘事豈相關（樽の中のものさえあれば、ほかのことなどどうでもいい）」と見える。

〔訳〕長安いっぱいに、花は数知れず。あっという間に夕日が桑楡に

かかる暮れつ方となり、一生も終わりに近づく。酔いの世界におっては賢者取り立てる道は特に閉ざされておるものを、よりによってこのわしは飲むべきではない樽の中のものに溺れてしもうた。

【袞（滾）繡求（毬）】這酒尋芳踏雪沽。弃琴留剣与。便大交我眼爭叉（爭）死生无路。末不仕途中兕我胡突。對着山河壯帝居。乾坤一草廬。便是我畫堂深処。那嚇蛮缸似酒面上浮蛆。不恋着九間天子長朝殿。曾如三尺黄公舊酒炉。但行処挈榼提壷。

〔校〕○袞繡求……鄭・寧本は「滾繡球」、徐本は「滾繡毬」に改める。後も同じ。○大……各本とも「待」に改める。○末不……鄭本は「莫不」に改める。○兕……徐・寧本は「買」に改める。○長朝殿……徐・寧本は「常朝殿」に改める。○曾如……寧本は「怎如」に改める。○酒炉……鄭本は「酒壚」に改める。

〔注〕○尋芳踏雪……「踏雪尋芳」という形で南宋の趙長卿の【念奴嬌】詞「梅」に「踏雪尋芳村路永、竹屋西頭遙識蕙（雪を踏んで香りを尋ねれば田舎道は長く、竹の家の西に遙かに花が見て取れる）」と見え、金の李俊民の「和王成之梅韻」詩（『莊靖集』巻四）にも「踏雪尋芳路帶沙、南枝初放兩三花（雪を踏んで香りを尋ねれば道は砂まじり、南の枝にやっと二、三の花がさいたところ）」と同様の表現が見えるが、これらはいずれも、南宋の史顯祖などの画題として知られる「踏雪尋梅」に基づくものであろう。「貶黄州」（于小穀本）第二折【滾繡毬】に「爲不學乘桴浮海鴟夷子、生扭做踏雪尋梅孟浩然（いかだに乗って海に浮かんだ鴟夷子皮を見ならわなんだばかりに、むざむざ雪を踏んで梅を尋ねる孟浩然のざまとは成り果てた）」と見えるように、灞陵橋で孟浩然が雪の中驢馬に乗って梅見に行ったという故事であるらしく、元雑劇では頻用される典故であり、これ自体を題材とした雑劇として、馬致遠に「凍吟詩踏雪尋梅」「風雪騎驢孟浩然」があったことが『錄鬼簿』に見え、周憲王朱有燉の「孟浩然踏雪尋梅」が現存するが、どこからこの故事が発生したかは不明である。ここではやはりよく画題として用いられたという、杜荀鶴の「冬末同友人泛瀟湘」詩に見える「就船買得魚偏美、踏雪沽來酒倍香（舟に行って買ってきた魚はえらくおいしいもの、雪を踏んで買ってきた酒は倍もかぐわしい）」とあわせて一句としたのであろう。○弃琴留剣……琴と剣をかたにして酒を飲むこと。唐の張喬の「贈友人」詩に「典琴賒酒吟過寺、送客思郷上灞陵（琴を質にれて酒を買い吟じつつ寺を通り、客を送り故郷を思って灞陵に上る）」と見え、雑劇では「城南柳」（息機子本）第一折【金盞兒】に「不許俺神仙留劍飲、偏容學士典琴沽（われら神仙が剣を預けて飲むのは認めずにおいて、学士どもばかりに琴をかたに酒を売りおるか）」と見える。この典故は、「遇上皇」（元刊本）第二折【感皇恩】に「可知道李太白、留劍飲、典琴沽（げにも李太白は、剣を残して飲み、琴を質入れして酒を買ったもの）」とあり、李白と結び付けて考えられていたようであり、「城南柳」の「學士」も李白を指すのかもしれない。○大……各本が改めるように通常は「待」と表記されるところであるが、元刊本では「大」と表記する例が多く、当時においては普通に行われていた可能性が高いので、特に改めない。以下同じ。○山河壯帝居……『神童詩』の「日月光天德、山河壯帝居。太平無以報、

願上萬言書（日月は天の徳を輝かせ、山河はみかどのおわすところに威厳を加える。太平の世にあってご恩に報いるすべとてなき身、せめて万言の意見書なりともたてまつりたいもの）」を踏まえるものと思われる。この詩は、陳の後主の作とされる「入隋侍宴應詔」の末句「願上東封（または登封）書」を改めたのみでそのまま用いたものだが、人口に膾炙しており、元曲でも頻用される。〇乾坤一草廬……金の趙秉文の「涿郡先主廟」二首之二（『滏水集』巻三）の「乾坤一草廬、鼎足事已了（天地の間にぽつんとある草の庵、そこで天下三分の計ははや定められた）」を踏まえているものと思われる。〇畫堂深処……『花間集』巻七に見える後蜀の顧敻【臨江仙】詞に「畫堂深處麝煙微。屏虚枕席、風細雨霏霏（豪華な部屋の奥深くに麝香の煙かすかに漂い、屏風の影にはいとしい人もいないのに枕とふとんがあるばかり、かそけく風吹き雨はしとしと）」、また蘇軾の【如夢令】詞「有寄」に「爲向東坡傳語。人在畫堂深處（東坡に伝えておくれ、私は豪華な部屋の奥深くにいると）」と見える。〇浮蛆……陶穀の『清異録』巻下「玉浮粱」に、「舊聞李太白好飲玉浮粱、不知其果何物。余得吳婢使釀酒、因促其功、答曰、尚未熟、但浮粱耳。試取一盞至則浮蛆、酒脂也。乃悟太白所飲蓋此耳（昔から李白は「玉浮粱」を好んで飲んだと聞いていたが、いったいどんなものなのか分からなかった。私は呉の女中を手に入れて酒を醸させたのだが、まだかせかしたところ、「まだできていません。『浮粱』しているだけです」と答えたので、試しに一杯取ってくると、蛆のようなものが浮いていた。酒の脂である。そこではじめて太白が飲んだのは多分これだったのだと悟った）」と見え、以後多く酒の詩に用いられる。〇長朝殿……通常の朝儀を「常朝」といい、それを行う場を「常朝殿」という例は五代以降多い。元刊本でも「范張雞黍」第二折【牧羊關】には「今日个東都門逢明（萌）冠不掛、常朝殿朱云（雲）檻不折（今時は洛陽の門に逢萌が冠を掛けることもなく、常朝殿にて朱雲が手すりを折ることもない）」、「楚昭王」第一折【那吒令】には「喒端坐在常朝殿九間（われらは九間の常朝殿に座し）」と見え、徐・寧本のように「常朝殿」に改めるべきかと見えるが、明本においてはすべての例が「長朝殿」と表記され、右の「范張雞黍」の例も明本では「長朝殿」と改められている。おそらく元明の間に、文言と白話で表記の使い分けが生じたのであろう。元代以降この語があまり使用されなくなることとも関わるのかもしれない。〇黄公舊酒炉……『世説新語』「傷逝」に「王濬沖爲尚書令、著公服、乘軺車、經黄公酒壚下過。顧謂後車客、吾昔與嵆叔夜・阮嗣宗共酣飲於此壚、竹林之遊亦預其末。自嵆生夭、阮公亡以來、便爲時所羈紲。今日視此雖近、邈若山河（王戎が尚書令となり、官服を着、大型の車に乗って黄公の飲み屋に通りかかった。振り向いて後ろの車に乗っている人にいうには、「私はむかし嵆叔夜（康）・阮嗣宗（籍）とこの飲み屋で大いに飲んだものだ。竹林の遊びにも末席に加えてもらった。嵆さんが若死にし、阮どのが亡くなってからは、時世にからめ取られてしまった。今日ここを見れば、近くなのに、まるで山河のように遙かかなたに見える）」とあるのに基づき、直接には温庭筠の「寄盧生」詩に「他年猶擬金貂換、寄語黄公舊酒壚（いつか官位示す金と貂の飾りを酒代に換えるつもりゆえ、なじみの黄さんの飲み屋に声を掛けておいてく

れ)」とあるのが、後に【堯民歌】に見える李白の縁語「金貂」を用いている点で関わるように見える。しかし、陸龜蒙の「和春夕酒醒」詩に「幾年無事傍江湖、醉倒黄公舊酒壚。覺後不知明月上、滿身花影倩人扶(何事もなく江湖のほとりで暮らすこと何年か、なじみの黄さんの飲み屋で酔いつぶれ、醒めてみれば知らぬ間に明月が上がって、全身に花の影うつして佳人に支えられておった)」が、末句が【醉太平】にも見える点で、直接の典故である可能性が高いものと思われる。なお、「酒壚」は飲み屋のことであるが、「三尺」とある点から見ると、酒の燗をする炉と思われている可能性が高い。とすると改める必要はないことになる。○挈榼提壺……「榼」は酒の入れ物。酒壺を持ち歩くということ。劉伶の「酒德頌」の「止則操巵執觚、動則挈榼提壺(止まっている時には杯を手にし、動いているときには酒壺をさげる)」を踏まえる。

〔訳〕この酒は陶淵明が梅をたずねたように雪を踏んで買い、琴を手放し剣を置いてきて手に入れたもの。酒ゆえにわしはみすみす生きるも死ぬもならぬこととなりはてたが、もしや役人暮らしをするうちに馬鹿になるまじないでも掛けられたか。山河がいろどり添えるこの帝都に向き合う、天地の間なるこの草の庵こそ、わが身にとっては豪華な部屋の奥深きところのようなもの。あの蛮族おどす手紙を載せた船はさながら酒に浮かぶおりのようなもの。九間もある天子さまの朝賀の殿なんぞに執着などあるものか、昔なじみの三尺の燗する台に及ぶはずとてありはせぬ。どこへなりとも手放さぬのは酒を入れた壺。

〔力士云了〕〔篭馬上了〕〔做尋末科〕〔見住了〕〔力士云了〕你道是我在此処無好処。〈我直喫的〉。

【倘秀才】《我直喫的》芳草展花裀繡褥。直喫的明月長銀臺畫燭。自有春風醉後扶。怎和那兒女輩。潑无徒。做伴侶。

〔校〕○我直喫的……徐・寧本は曲牌名の後ろに移動する。○明月長……徐本は「明月上」、寧本は「明月掌」に改め、鄭本も校記で疑問を呈する。

〔注〕○篭馬……「合汗衫」(元曲選本)第一折と「爭報恩」(元曲選本)楔子・第一・二折に「籠驢把馬、願隨鞭鐙」という同一の表現が見える。これらはいずれも恩人への報恩を誓う際の言葉であるが、「合汗衫」の内府本では「隨驢把馬」となっている。また「陳州糶米」(元曲選本)第三折【黄鍾煞尾】には「你只問王家的那潑賤。也不該着我籠驢兒步行了偌地遠(王の家のあの女郎にも、わしに「籠驢」させてこんな遠くまで歩かせるとはけしからんといってやれ)」と見えるが、これは正末である包拯が芸者の王粉蓮を驢馬に乗せてやり、ついていったことをさす。つまり、主人が驢馬に乗る世話を家来がすることであろう。「籠頭」がくつわのことであることを考え合わせれば、ここでいう「篭(籠)馬」とは、高力士が馬のくつわを取って李白を捜し回ることかと思われる。○高力士云……いつまで飲むつもりだと聞くのであろう。○花裀……『開元天寶遺事』「花裀」に、「學士許愼選放曠、不拘小節。多與親友結宴於花圃中、未嘗具帷幄設坐具、使童僕輩聚落花、鋪於坐下。愼選曰、吾自有花裀、何消坐具(学士の許愼選は開けっぴろげで小さなことにこだわらない人だった。よく親戚友人と花園で宴会を開いた

が、幕や椅子を用意したことがなく、召使に散った花を集めてすわるところに敷きつめさせた。愼選は、「わしには花の座布団があるゆえ、椅子などいらぬわ」といったものである）」とある。〇明月長……各本とも疑問を呈しているが、月の光が長く伸びるということではないかと思われる。〇銀臺畫燭……『江湖後集』所収の南宋の張蘊「海棠」詩に「錦幃睡起嬌無力、羞見銀臺畫燭明（錦のカーテンの中眠りより起きてみようとするがしどけなく力も入らず、銀の燭台に美しいろうそくが明るいのを見るのも恥じらわれる）」とある。〇春風酔後扶……元好問の「此日不足惜」詩に「太虚爲室月爲燭、酔倒不用春風扶（大空は部屋、月は燭、酔い倒れても春風に支えてもらうには及ばない）」とあり、これに基づくのではないかと思われる。

〔訳〕［高力士がいう］［馬を引いて登場］［末を捜すしぐさ］［会う。住］
［高力士がいう］おぬしはわしがここにいてもいいことなどないというが、
春の草が花のしとねを用意してくれるまで、銀の燭台、美しいろうそくに月の光が長く伸びるまで飲み続けてくれよう。春風が支えてくれるゆえ、あの女子供や無頼のやからとつきあうことなどできようか。

［力士云了］你朝治里不如我這里。
【袞（滾）繍求（毬）】禁庭中受用処。止不過皓歯歌細腰舞。鬧炒二（炒）物（勿）知其數。這其間衆公卿似有如无。奏梨園樂章曲。按廣寒羽衣譜。一声二（声）不叶音律。到不如小槽邊酒滴真珠。你那里四時開宴充肥鹿。我這里万里搖舡捉酔魚。胷捲江湖。

〔校〕〇物……徐・寧本は「勿」に改め、鄭本は校記で「物字は不明」とする。〇充……寧本は「瞳」に改める。
〔注〕〇皓歯歌細腰舞……李賀の「將進酒」に「皓齒歌、細腰舞。況是青春日將暮（白い歯のぞかせてうたい、細い腰にて舞う。ましてや青春の日は暮れようとするものを）」とあるのを踏まえる。この曲の第八句と【四煞】の第一句もこの詩を踏まえている。この詩を踏まえた表現は、「竹葉舟」（元刊本）第四折【滾繍毬】に「按双成廣寒殿纖腰舞。聽麻姑女蓬莱皓齒哥（歌）（董雙成が月宮にて細い腰で舞う拍子を取り、麻姑が蓬莱山で白い歯を見せてうたうのを聴く）」など、雑劇にもいくつか例がある。〇物知其數……このままでは意味を取りがたい。字形から見て、徐・寧本に従って「勿知其數」と改めるべきか。ただし、通常は「不知其數」または「莫知其數」であり、「勿」を用いる例はほとんどない。〇似有如无……楊萬里の「積雨小霽暮立捲書亭前」二首之一に「似有如無風細甚、柳絲無頼恰先知（あるやなしやと風はまことにかすか、柳の糸は横着にも寒くなることを予知していたよう）」とある。〇廣寒羽衣……いわゆる霓裳羽衣曲のこと。『楽府詩集』巻五十六の王建「霓裳辭」の按語に詳しい。〇小槽邊酒滴真珠……第二句同様李賀の「將進酒」に見える句「瑠璃鍾。琥珀濃。小槽酒滴珍珠紅（瑠璃の杯に、ねっとりと琥珀の輝きの酒。小さなおけから酒が滴れば紅の真珠のよう）」を踏まえる。〇肥鹿……第一折【金盞兒】にも見えたように、安禄山をたとえているものと思われる。〇胷捲江湖……「胸捲江淮」「胸捲江濤」など、元曲では韻に応じて変化した形で頻用されるが、詩詞では用例がない。「伊尹耕莘」（内府本）

第四折【新水令】「胸捲江湖。得志也叩鑾輿（胸の中に江湖を抱き、志を得て帝をたずねる）」など。

〔訳〕［高力士がいう］おぬしの朝廷などわしのところには及ぶまい。

　禁裏で楽しむとて、白い歯のぞかせてうたい、細い腰にて舞う女どもが、がやがやと数も知れぬほどおるばかりのこと。その時には大臣どもなどいてもいなくても同じ。梨園のうたを奏で、月宮なる羽衣の楽譜にあわせてはみても、どの音も調子っぱずれで、「小さな桶のふちに酒が真珠としたたる」には及びはせぬ。おぬしのところでは、四季折々に宴開いて太った鹿の腹を満たしておるが、わしの方では万里のかなたまで船を揺らして酔った魚をとらえ、胸の内には江湖をいだいておるわ。

［力士交末上馬了］力士、我醉也。只怕去不的。［上馬了］

【脱布衫】花梢驚燕子鶯雛。《錦》韉蕩蝶翅蜂須。玉吉（轡）迎桃蹊杏塢。金蹬挑落花飛絮。

〔校〕○韉……各本とも前に「錦」を補う。○玉吉……各本とも「玉轡」に改める。○金蹬……原本は明らかに「蹬」だが、各本とも特に校を付さず「金鐙」とする。

〔注〕○韉……句格によれば三―四リズムの七字句のはずであり、一字足りない。『開元天寳遺事』「看花馬」に、「長安俠少、毎至春時、結朋聯黨、各置矮馬、飾以錦韉金絡、並轡於花樹下往來、使僕從執酒皿而隨之、遇好囿則駐馬而飲（長安の男伊達たちは、春になると仲間を組んで、それぞれ小馬を用意し、錦のしたぐらに金糸のおもがいを掛け、くつわを並べて花の木の下で行き来し、召使に酒と皿を持ってついてこさせて、いい庭があると馬を止めて飲んだものである）」とあり、各本のように前に「錦」を補うのが適当であろう。この曲は全体にこの故事を踏まえている可能性がある。○蝶翅蜂須……南唐の張泌の「芍藥」詩（『才調集』巻四）に「香清粉澹怨殘春、蝶翅蜂鬚戀蘂塵（香りは清く白い色は淡く、去りゆく春を怨むかの如く、蝶のはねと蜂のひげは花心の粉を慕うよう）」と見える。

〔訳〕［高力士、正末を馬に乗せる］力士よ、わしは酔ってしまった。行けまいよ。［馬に乗る］

花の梢に燕や鶯の雛を驚かせ、錦のしたぐらには蝶のはねと蜂のひげがゆれる。玉のくつわは桃の小道と杏の丘を駆け抜け、金のあぶみは散りゆく花と飛びゆく柳の糸を踏まえるように行く。

【醉太平】不比趂雕輪綉轂。遊月巷云（雲）衢。又不比荔枝千里赴皇都。止不過上天街御路。全不似数声啼鳥留人住。他子大一鞭行色催人去。我怎肯滿身花影倩人扶。一言既出。

〔校〕○云衢……鄭本は「雲衢」に改める。（徐・寧本は簡体字のため原本に同じ）。○大……各本とも「待」に改める。

〔注〕○雕輪綉轂……飾りをつけた車輪、転じて美しい車のこと。歐陽修の【御帯花】詞に「沙堤遠、雕輪繡轂、爭走五侯宅（宰相の屋敷へと続く砂の堤は遠く、美しい車が争って権力者の屋敷へと走る）」と見える。年代的にぎりぎりのところではあるが、あるいは元の王禎の『農書』巻十七「捲車」に見える詩「不比看花南陌上、雕輪繡轂殷

春雷（花見に出かける南の小道で、きれいな車が春雷のような音を立てるのとは大違い）」と関わるのかもしれない。〇月巻云衢……『太平廣記』巻二十六・巻七十七の「葉法善」や敦煌変文「葉淨能詩」などに見える道士葉法善が玄宗を月世界に連れて行ったという話を踏まえるものか。〇荔枝……楊貴妃が荔枝を好んだことは、唐の李肇の『唐國史補』「楊妃好荔枝」などに見えるほか、杜甫の「病橘」詩に「憶昔南海使、奔騰獻荔枝。百馬死山谷、到今耆舊悲（思えば昔南海の使者は、大あわてで荔枝を献上し、山や谷で死んだ馬が百頭、今でも老人たちは悲しんでいる）」、「解悶」十二首之九にも「先帝貴妃今寂寞、荔枝還復入長安（先帝も貴妃もいまはいなくなってしまわれたが、荔枝はまた長安に入ってくる）」とあるが、ここでは有名な杜牧の「過華清宮絶句」三首之一に見える「一騎紅塵妃子笑、無人知是荔枝來（一騎紅の塵を巻き上げて来るのを見て貴妃は笑うが、荔枝が来たのだと知る者とてありはせぬ）を意識している可能性が高いであろう。〇数声啼鳥留人住……「數聲啼鳥」の例は詩詞に多く見られるが、ここはおそらく柳永の【留客住】詞に「煙邨院落、是誰家、緑樹數聲啼鳥（靄たちこめる村の庭は、誰の家やら、緑の樹に鳥の鳴き声幾たりか）」を詞牌名を含めて用いたものと思われる。〇一鞭行色……これも詩詞に頻用される語であるが、金の李俊民の「送郡侯段正卿北行」二首之一（『荘靖集』巻二）に「獵獵霜風墮指寒、一鞭行色抵天山（ビュービュー吹く霜を含んだ風は指を堕とすような寒さ、一鞭当てて旅立ちの気配ただよわせ天山に赴く）」が当時知られていたようである。〇催人去……北宋の孫洙の【菩薩蠻】詞に「樓頭尚有三通鼓、何須抵死催人去（櫓ではまだ三回太鼓を打っている。どうしてこんなに必死で旅立ちをせき立てるのか）」とあり、これが孫洙の死の予言となったという故事がよく知られていたようである点から考えて、この詞を踏まえている可能性があろう。ここでは高力士がせかすことをいうのであろう。〇滿身花影倩人扶……【滾繡毬】の注で引いた陸龜蒙の「和春夕酒醒」詩に見える句。〇一言既出……歐陽修の「駟不及舌説」に「俗云一言出口、駟馬難追（世間では「一言口から出てしまえば、四頭立ての馬車でも追いつけない」という）」とあり、『五燈會元』巻十二では前の句が「一言已出」とここに近い形になっている。当時の諺で、前句の形は必ずしも一定していなかったのであろう。元曲では「東窗事犯」（元刊本）第二折【鮑老兒】「你心我知、一言既出、四（駟）馬難追（おぬしの心はわかっておる。一度口に出してしまえば取り返しはつかぬぞ）」など、「一言既知」の方が普通である。ここでは歇後語的に機能して、実は馬で突っ走ることをいっているものと思われる。

〔訳〕美しい車を走らせて、月と雲の小道を行くのとも、荔枝が千里のかなたから都へ赴くのとも訳が違う。ただ天子さまのお成り道を行くだけのこと。鳥が幾声か啼いて旅立ちを引き留めるなどというのとは大違い、一鞭当てれば旅立ちの気配とばかりにとにかく早く行けとせかすばかり。「全身に花の影うつして佳人に支えられる」などまっぴらごめん、「一言口に出せば」という奴で、全速力で突っ走るぞ。

〔正末外末了〕〔駕旦上了〕〔末騎馬上了〕

【倘秀才】恰離了光燦二（燦）花叢錦簇。又來到鬧炒二（炒）車塵馬足。

抵多少白日明窗過隙駒。勝急慣、更疾如。狂風驟雨。

〔校〕○正末外末了……徐本は「正末外末下」、寧本は「正末外末下了」に改める。

〔注〕○正末外末了……はっきりしたことはいえないが、後に「上」とある以上、正末と外末がいったん退場することは確実であり、おそらく徐本・寧本のいずれかに従うべきだろう。ここで長安の町から宮廷に舞台は移ることになる。○末騎馬上了……第一折【酔扶歸】の注で述べたように、李白が「天子門前尚容走馬（天子の門前でも馬を走らせることが許されていたものを）」と書いたという故事を踏まえるか。○車塵馬足……歐陽修の「相州晝錦堂記」に「而所謂庸夫愚婦者、奔走駭汗、羞愧俯伏、以自悔罪於車塵馬足之間（そしていわゆる愚かな男女という連中は、冷や汗流しながら駆けずり回り、恥じて突っ伏し、車の塵や馬の足の間で自分の罪を悔いるはめになる）」と見え、後世これを踏まえた表現が多く用いられるが、ここでは『歸潛志』巻三に見える金の劉勲の絶句に見える「何時得箇茅庵子、不在車塵馬足間（いつになったら隠遁して、車の塵や馬の足のもとには身を置かない人と会えようか）」を踏まえている可能性があろう。なお、元曲の例としては他に「焚兒救母」（元刊本）第二折【紫花兒序】の「你一（看）那車塵馬足、作戯敲羅（鑼）。聒耳笙歌（あの車の塵に馬の足、芝居の太鼓、耳にかまびすしい音楽をごらん）」がある。○過隙駒……人生のはかなさを表現する定型表現。『荘子』「知北遊」に「人生天地之間、若白駒之過郤、忽然而已（人間は天地の間に生まれても、白い若駒が戸の隙間を過ぎるように、あっという間に終わってしまうだけのことである）」とあるほか、『史記』の「留侯世家」「魏豹彭越列傳」にも「人生一世間、如白駒過隙」という形で見え、当時の諺だったのではないかと思われる。この部分が踏まえている可能性がある例としては、黄庭堅の「窗日」詩の「歎息西窗過隙駒、微陽初至日光舒（ため息つきたくなるのは、西の窓に隙間を過ぎる若駒のように、かすかな日が来たと思えば光が伸びてくること）」がある。○勝急慣……「勝」は「賸」「剩」「聖」とも表記する。強調だが、特に早いときに「勝到」といった形で用いられる。「慣」は接尾語。大急ぎで。

〔訳〕［正末・外末退場］［駕・旦登場］［正末、馬に乗って登場］

光り輝く錦繍の色街あとにして、車馬でにぎわう大通りへ。これはとんだ「人生は昼間の窓に白駒の隙を過ぎるが如し」じゃ。急ぎに急ぎ、狂風驟雨よりも速いわ。

［末跪馬了］［旦駕了］［駕怒了］［末見駕了］陛下。不干臣事。是陛下馬的不是。

【叨又（叨）令】鳳城有似溪橋路。落紅乱點莎茵緑。淡烟深鎖垂楊樹。因此上玉驄錯認西湖路。委實勒不住也末哥。又、（委實勒不住也末哥）。便似跳竜門及弟（第）思郷去。

〔校〕○末跪馬了……寧本は「末跑馬了」に改める。○旦駕了……徐本は「旦驚了」、寧本は「旦罵了」に改める。○思郷去……徐本は「思歸了」に改める。

〔注〕○末跪馬了・旦駕了……このままで解釈すると、李白が馬を跪かせ、楊貴妃が乗るということになる。『朝野僉載』巻五に「至石橋、

馬跪地不進（石橋まで来たところで、馬が跪いて進まなくなった）」とあるように、馬が跪くという表現もあり、楊貴妃を馬に乗せるため馬の姿勢を低くしたと取れないこともないが、寧本が改めるように「跑」の誤りである可能性は高いものと思われる。「駕」も「驚」「罵」いずれかの誤りである可能性が高そうに思われる。仮に「跑」「驚」として訳しておく。○溪橋路……詩詞に多く用いられる語。『中州楽府』に見える王特起の【梅花引】の「人家籬落炊烟濕。天外雲峯迷淡。野雲昏。失前村。溪橋路滑、平沙没舊痕（村の家から炊事の烟が湿っぽくあがり、天のかなたに雲かかる峰が淡く見えるかどうか。野の雲は暗く、先の村を見失う。谷川に掛かる橋への道は滑りやすく、平らかに広がる砂地には人の跡もない）」を踏まえるか。○淡烟深鎖垂楊樹……無名氏（何籀の作ともいう）の【點絳唇】詞「春閨」（『草堂詩餘』巻一）に「春雨濛濛、淡烟深鎖垂楊院。暖風輕扇。落盡桃花片（春の雨がたちこめ、淡い靄がしだれ柳の庭を深くとざす。暖かい風に軽い扇、桃の花びらも落ちつくした）」とあるのを踏まえる。○玉驄錯認西湖路……『武林舊事』巻三「西湖遊幸」に、南宋の高宗が太上皇となった後、微行先の酒肆で太学生兪國寶が壁に書き付けた【風入松】詞を見て、兪を取り立てるという、後に『警世通言』巻六「兪仲舉題詩遇上皇」の題材になった有名な故事が見える。その詞の「一春長費買花錢。日日醉湖邊。玉驄慣識西湖路、驕嘶過沽酒樓前（春の間ずっと花を買い占めるお金のかかること。日々湖のほとりで酔いしれる。玉の如き馬は西湖への道筋にもおなじみ、うれしげにいななきつつ酒楼の前に通りかかる）」を踏まえるものであろう。なお、『能改齋漫録』巻六「玉花驄照夜白」には、「明皇雜録記、上所乘馬有玉花驄・照夜白。又異人録云、玉花驄者以面白。故又謂之玉面花驄（『明皇雜録』によると、「陛下が乗られる馬には玉花驄・照夜白があった」という。また『異人録』には、「玉花驄というのは顔が白かったからである。それゆえ玉面花驄ともいう）」とあり（現行の『明皇雜録』にはこの記事は見えない）、杜甫の「丹青引」にも「先帝天馬玉花驄」という句が見える。ここでこの詞を踏まえたのは、玄宗が実際に乗っていた馬と掛けているのかもしれない。○便似跳竜門及弟思郷去……馬に関わる典故として、有名な孟郊の「登科後」詩の「春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花（春風の中いい気分で馬の足も速く、一日で長安の花を見尽くす）」を踏まえているのであろう。よりこの部分に近い例としては、白居易「及第後歸覲留別諸同年」詩の「翩翩馬蹄疾、春日歸郷情（馬のひづめも軽やかに速い、春の日故郷に帰るこの思い）」がある。

〔訳〕［正末、馬を走らせる］［旦、驚く］［駕、怒る］［正末、駕に会う］
陛下、私のせいではありませぬ。陛下の馬が悪いのです。
都は谷川に掛かる橋にも似て、緑なすはまなすの敷物に紅の花乱れ散り、淡い靄はしだれ柳を深くとざすといった有様ゆえ、それがため玉の如き馬も西湖への道と誤ったという次第。まこと抑えがきかなかったのです、まこと抑えがきかなかったのです。科挙に及第して故郷に帰ろうと馬の足が止まらないようなもの。

［等云了］［末飲酒科］［駕賜衣服了］
【喜春來】又不是風流天宝新人物。子是个落托長安旧酒徒。怎消得明

聖主。賜一領濺酒護身符。

〔校〕○【喜春來】の定格は七◦。七◦。七◦。三◦。五◦。であり、七字句が一句不足する。一句脱落があるのか、あるいはこのような変格も存在するのか、確かなことは分からない。

〔注〕○云了……おそらく徐本が推定するように主体は玄宗であろう。○風流天宝新人物……「金錢記」（古名家本）第一折【油葫蘆】に「則他那殢風流天寶君王駕。簇擁着个嬌滴滴海棠花（色好みの天宝の君の乗り物が、色気滴る海棠の花を取り囲んで）」と見え、張可久の【折桂令】「海棠」にも「伴庭院黄昏燕子。歎風流天寶環兒（庭にともする黄昏の燕、粋な天宝の環兒（楊玉環、つまり楊貴妃のこと）を嘆じ）」とあり、「風流天宝」で熟した表現だったのものと思われる。○新人物……唐の黄滔の「壬癸歳書情」詩に「冠蓋新人物、漁樵舊弟兄（高位にあるのは新しく出てきた者ばかり、漁師や木こりは昔からの兄弟のような者）」とあり、時代についていけないという視点から、現在栄えている者を批判的にとらえる言葉のようである。○落托長安……「落托」は豪放で物事にとらわれないさま。金の呂子羽の「李白醉歸圖」詩（『中州集』巻八）に「春風醉袖玉山頽、落魄長安酒肆迴。忙煞中官尋不得、沈香亭北牡丹開（春風に酔った袖を吹かせて玉山の崩れるかの如く、長安で自堕落に暮らして飲み屋から帰る。宦官は大あわてしても探し当てられず、沈香亭の北に牡丹は開く）」とあり、本劇の内容と一致する点から考えて、この詩を踏まえているものかと思われる。○舊酒徒……陸游の「衰病」詩に「世無魯國眞男子、心憶高陽舊酒徒（世に魯国の真男子はなく、思い出すのは高陽の昔ながらの酒飲みのこと）」とあるように、『史記』巻九十七「酈生陸賈列傳」に見える「走復入言沛公、吾高陽酒徒也（もう一度中に駆け込んで沛公にいえ、わしは高陽の酒飲みだとな）」という有名な酈食其の言葉に基づき、王惲「題醉仙圖」三首之二（『秋澗集』巻二十七）に「等是高陽舊酒徒、醉鄉眞樂到華胥（いずれも高陽の昔ながらの酒飲みにて、酔郷は楽しく理想郷のよう）」とあるように、李白のたとえに用いられる。○明聖主……すぐれた皇帝のこと。早くは『漢書』巻九十八「元后傳」に「明聖主樂進賢也（すぐれた君主は賢者を登用することを好むものでございます）」と見え、白話文学に対しては、唐の周曇の「詠史詩」「郭欽」に「晉室既無明聖主、果爲胡虜亂中原（晋皇室にすぐれた皇帝がいなかったばかりに、やはり蛮族に中原を乱されることになってしまった）」の影響が強いものと思われる。元曲では「楚昭王」（元刊本）第三折【醉春風】「是你送了正直臣、是你昏俺明聖主（まっすぐな臣下を破滅させたのもお前、すぐれた君主のはずのわしの頭をくらませたのもお前）」などの例がある。○護身符……ふつうは「お守り」を指すが、ここでは前に「一領」という衣服に用いる量詞がある点から考えて衣服を指しているはずである。天子から下賜されたので、そのありがたさを「護身符」という語で表現したのであろう。比喩的な用法の例としては、「趙氏孤児」（元刊本）第四折【堯民歌】の「今日人害你你何如。子你是趙氏孤児護身符（今日人からやられる身となってどんな気分じゃ、貴様こそ趙氏孤児のお守りだったのだ）」がある。

〔訳〕［天子がいう］［酒を飲むしぐさをする］［天子が服を賜う］いなせな天宝の、今をときめく人物であるわけでもなし、たかが自堕

落な長安の昔ながらの飲んだくれ。私が酒をこぼすようなお守りとなる衣服をくださるには及びませぬ。

【堯民哥（歌）】（【十二月】）也不宜幞頭象笏。玉帶金魚。金貂綉襖、真紫朝服。臣再洪飲天之美祿。倘或間少下青凫。

〔校〕○堯民歌……各本とも「下青凫（趺）」までを【十二月】として独立させる。○青凫……徐・寧本は「青趺」とする。

〔注〕○堯民歌……【十二月】と【堯民歌】は続けて用いられるのが常であるため、別の曲牌という認識が薄れて、まとめて表記されることになったのであろう。○幞頭……頭巾の一種。『隋書』巻十二「禮儀志七」に「故事用全幅皁而向後襆髮、俗人謂之襆頭。自周武帝裁爲四脚、今通於貴賤矣（昔からのやりかたとしては、幅（二尺二寸）一杯の黒い布で後ろ向きに髪を覆うものであって、庶民は「襆頭（襆と幞は通用する）」と呼ぶ。周の武帝の時から四本の脚（頭巾から垂らす結び目）ができるように裁つことになり、今では貴賤を問わず用いているのである）」と見える。○象笏……象牙の笏。高官が天子にまみえる時に手にした。『舊唐書』巻四十五「輿服志」に「五品已上執象笏（五品以上は手に象牙の笏を持つ）」と見える。「陳摶高臥」（元刊本）第二折【哭皇天】に「穿着底紫羅袍便似酒布袋、秉着這白象笏似睡餛飩（紫の薄絹の上着を着れば酒の袋のよう、白い象牙の笏を持てば居眠りするワンタンのよう）」など、ここに類似した用例がある。○玉帶金魚……「玉帶」は高官が着用する玉の飾りをつけた帯。「金魚」は「金魚袋」のことであろう。『舊唐書』巻四十五「輿服志」に「職事三品已上龜袋宜用金飾、……神龍元年二月、内外官五品已上依舊佩魚袋（三品以上の官職にある者の亀袋は金の飾りをつけることとした……神龍元年二月、内外の官で五品以上の者は魚袋を身につけることに戻した）」とあり、唐代では三品以上の官吏は紫の袍に金の装飾をつけた魚袋（魚符を入れる袋）を携えたという。辛棄疾の【清平樂】詞に「男兒玉帶金魚。能消幾許詩書（男子たる身が玉帯と金魚袋を手に入れるのに、どれほどの学問がいるだろうか）」と見える。○金貂……黄金の玉と貂の尾でできた装飾品。もと漢代に天子側近の武官が冠に付けた。元来は『晉書』巻四十九「阮孚傳」に見える「嘗以金貂換酒、復爲所司彈劾、帝宥之（金貂を酒に換えたことがあり、また当局から弾劾されたが、帝は許した）」という故事に基づき、以後文人が地位にこだわらないたとえとして頻用され、李白についても、無名氏の【柳營曲】「李白」に「玉帶金貂。宮錦仙袍（玉帯に金貂の飾り、宮中の錦で作った仙人の上着）」と見える。「玉帶」や「金貂」は、李白が身に付けたものとして象徴的なものであったらしい。○天之美祿……酒の美称。『漢書』巻二十四下「食貨志下」に「酒者天之美祿、帝王所以頤養天下、享祀祈福、扶衰養疾（酒とは天からのすばらしい賜り物にて、帝王が天下を養い、まつりを行って福を願い、老人や病人を助ける手段でございます）」とあり、雑劇においては「風光好」（古名家本）第三折の宋齊丘の白に「學士息怒、酒乃天之美祿（学士殿お怒りめさるな。酒とは天からのすばらしい賜り物ですぞ）」と見える。○倘或間……もし、仮に。「七里灘」（元刊本）第四折【殿前歡】の後の白に「倘或間失手打破這盞兒呵、家裏有幾个七里灘陪得過（もしうっ

かりこの杯を割ってしまったら、家に幾つ七里灘があっても弁償しきれまい)」などの用例がある。〇青鳧……鴨のことだが、ここでは銭をさす。『太平御覧』巻八百三十六に引く『洞冥記』に、青鴨が三人の童子に変身し、「鯨文大錢五枚」を各自持っていたという故事に基づくという説もあるが、おそらく「青蚨」と同じものであろう。青蚨はかげろうのこと。かげろうの親子の血を二つの銭に塗れば、片方を使っても残った一方が慕って戻ってくるという説話（『捜神記』巻十三）に基づいて、梁の簡文帝の「菩提樹頌」に「紅粒盈箱、青蚨委貫（米粒は箱に満ち、銭は連なる）」と見えるように、早くから銭の意味で用いられたが、「青鳧」という表記も、陳の張正見の「謝賜錢啓」に「青鳧委質、笑夷甫之不言（銭が置かれて、王衍が口にしようとしなかったことを笑い）」とあるように早くから用いられている。従って、ここで改める必要はないであろう。ただし、現存する元雑劇の用例は、「遇上皇」（元刊本）第二折【採茶哥（歌）】の「三个儒人何消恐懼。我替還口債出青蚨（インテリのお三方心配ご無用。私が出過ぎた口の見返りにお金を出しましょう）」など、すべて「青蚨」である。〇末句……さきに述べたように、次の【堯民歌】とセットで用いられるのが普通なので、曲牌の切れ目で意味が切れず、次の曲につながるものと思われる。

〔訳〕高官の頭巾をかぶり象牙の笏を手にしたり、玉帯に金魚袋を付けたり、金や貂の尾の飾りをつけた冠をかぶって刺繍を施した袷を着込んだり、紫色の大礼服をまとうなどというのは私にふさわしくもございませぬ。私はもっと、天の美禄といわれておりますお酒を、心おきなく飲みとうございます、もしお金を借りるようになったとしても。

《【堯民歌】》也強如鳳城春色典琴沽。白馬紅纓富之余。披一襟瑞靄出天衢。携兩袖天香下蓬壺。須臾二二（須臾）行過長安市上去。便是臣衣錦還郷去。

〔校〕〇還郷去……鄭本は校記で「去」が韻字として重複するため「處」とすべきかと述べ、寧本も校記で賛同する。

〔注〕〇鳳城春色……唐の韋承慶の「寒食應制」詩に「鳳城春色晩、龍禁早暉通（都に春も暮れんとする時、禁中に朝の光がさし）」と見えるが、雑劇ではもっぱら美酒を意味する。「看錢奴」（元刊本）第二折【滾繡求（毬）】に「這酒勝厨中滿殿香、赶青州從事白、不枉喚做鳳城春色（この酒は調理場の満殿香にまさり、青州従事白をも追い払うものにて、鳳城春色の名にふさわしい）」、「岳陽樓」（古名家本）第四折【駐馬聽】「將我環絛扯住。怎教鳳城春色典琴沽（わしの帯を引いて留めるようでは、琴を質に入れて鳳城春色を買うこともままならぬ）」など元曲に散見する。「看錢奴」に見える「滿殿香」は、『至大金陵志』巻七に「歲貢土物」として「滿殿香麴壹萬斤」と見え、『居家必用事類』巳集「酒麴類」にも「滿殿香麴方」として造り方が見える点からして当時の美酒の名と思われ、他の二種も実際に酒の名であった可能性が高かろう。また「岳陽樓」の例はこの箇所と同じであり、定型表現であろうと思われる。〇典琴……飲み代を出すため琴を質入すること。【滾繡毬】の注を参照。〇白馬紅纓……白い馬とそれにつけられた紅色のむながい。身分が高いことを示しているのであろう。

王惲の【南郷子】詞（『秋澗集』巻七十六）に「和幹臣樂府南郷子、南樂言懷中間更易兩韻、蓋前人用音意之例也」に「兒女笑蘇秦。白馬紅纓彩色新（女子供は蘇秦の、白馬に紅のむながいかけて鮮やかな姿を見て笑おう）」とみえるほか、元曲にも散見する。「替殺妻」（元刊本）第二折【倘秀才】「到如今舊頭巾遊（遮）不了頂門、却是末白馬紅嬰（纓）彩色新（今となっては古い頭巾が頭をおおうこともなりかねる有様で、白馬に紅のむながいかけた鮮やかな姿などとんでもない）」など、やはりあとに「彩色新」（「彩衫新」とする例も多い）を伴って用いられるのが一般であり、これで定型の表現であったらしい。○兩袖天香……蘇軾「和子由除夜元日省宿致齋」三首之二「朝回兩袖天香滿、頭上銀幡笑阿咸（朝廷より帰ってくれば両袖に天子さまの香が満ち、頭上の銀の旗見て阿咸を笑う）」に基づくものと思われる。○衣錦還郷……項羽や朱買臣の故事を踏まえることはいうまでもないが、この通りの言い回しが見える例は、『梁書』巻九と『南史』巻三十八に見える柳慶遠が雍州刺史として赴任する際に梁の武帝がいった「卿衣錦還郷、朕無西顧之憂矣（君が故郷に錦を飾ってくれれば、わしにも西の心配がないというものじゃ）」が最初のようである。元雜劇では、「薛仁貴衣錦還郷」「凍蘇秦衣錦還郷」など、題名に用いるものだけで数種に上る。○還郷去……元刊本では韻字の重複自体は珍しいことではないが、効果を狙って意図的に行う場合以外は、二句連続することはまずない。鄭・寧本がいうように「去」を「處」に改めるべきかもしれない。

［訳］琴を質入して美酒を買い、白馬に紅のむながいをつけるなど、富貴の至りといっているよりはまし。朝廷のめでたきもやを胸元一杯にいただいて都大路に出で、両の袖に宮中のお香をはらませて蓬壺の仙界より下って行こう。もうすぐ、もうすぐ、長安の飲み屋街へたどりつけば、それこそ故郷に錦を飾ると申すもの。

［末帶酔出朝科］古人尚然如此。

【四煞】想着劉伶数尺墳頭土。誰恋架上三封天子書。那酒更壓着救旱恩澤、洗沁（心）甘露。止渇青梅、灌頂醍醐。怕我先嚐後買、散打令（零）兜、高價寛沽。月明注（南）浦。春醉酒錢鹿（麤）。

［校］○恩澤……徐本は「恩霖」に改める。○洗沁……各本とも「洗心」に改める。○令兜……各本とも「零兜」に改める。○注浦……徐・寧本は「江浦」、鄭本は「南浦」に改める。○春醉……徐本は「春醅」に改める。○酒錢……鄭本は「酒×」、寧本は「酒巾」、徐本は「酒久葛」とする。「酒」の後の文字は「久」に似ているが、注に引く典故から考えても「錢」の異体字「豕」であろう。従って徐・寧本のように改める必要はない。○鹿……鄭本は「×」とし、徐・寧本は「漉」に改める。

［注］○劉伶……劉伶は竹林七賢の一人。酒を好み、いつ死んでもいいように、クワを持った召使を従えていたという。この句は、【滾繡毬】でも踏まえられていた李賀「將進酒」の「勸君終日酩酊醉、酒不到劉伶墳上土（一日中酔いどれていなさるがよい。酒は劉伶の墓の土までは届かないのだから）」に基づくものであろう。○架上三封天子書……天子のお召しの書状ということであろう。「架上」はよく分から

ないが、書架に置いてあるということか。「飛刀對箭」（内府本）第二折【滾繡毬】にも「存的我這胸中三巻黃公略。我愁甚麼架上三封天子書（この胸中に三巻の黄石公の書があるからには、書架の上には天子さまより賜った三通のお召しの書状という身になることなど造作もない）」という例があり、定型表現であったらしい。○更壓着……まさる。宋の蔡肇の「次韻上文潛丈」詩（『同文館唱和詩』巻七）に「已傾太白酒船空、更壓少陵飯山苦（李白の大杯飲み尽くした上に、杜甫の飯顆山の苦しみなど目ではない）」と見えるように、「更壓」という形で詩でも用いられる。元雑劇においても「替殺妻」（元刊本）第二折【倘秀才】「且休説放錢的□□□（龐居士）、更壓着養劍客的孟嘗（嘗）君（来世のために財産手放した龐居士はいわずもがな、剣客養った孟嘗君にもまさる）」など用例多数。○止渴青梅……『世説新語』「假譎篇」に見える行軍中に水に困ったとき、曹操が「前有大梅林、饒子甘酸、可以解渴（前に大きな梅林があって、実もたっぷりで甘くて酸っぱいから、のどの渇きを潤すことができるぞ）」といったので、兵士たちは唾が出て前進することができたという故事を踏まえる。○灌頂醍醐……仏教で出家する時やあるいは阿闍梨の位を授ける時、頭から水や醍醐をかけたという。張耒「寄蔡彦規兼謝恵酥梨」二首之一に「舊園歌舞唐宮廢、灌頂醍醐佛國來（昔の庭園での歌舞は唐の宮殿とともに失われたが、頭に注ぐ醍醐は仏の国からやってきた）」と見える。○先嘗後買、散打零兜、高價寛沽……いずれも酒の買い方であろう。「味見して買う買い方」「けちくさく少しずつ買う」「高値でどんどん買う」ということか。「兜」は買うことかと思われるが、他に類似の例がない。

○月明注浦……許渾の「過湘妃廟」詩に「古木蒼山掩翠蛾、月明南浦起微波（老木と蒼い山が翠の眉の美女を掩い、月明らかな南浦にさざ波が立つ）」とあり、鄭本のように「南浦」とするのが妥当かと思われるが、字形からすると「江浦」の方が近く、時代は下がるが、元末明初の人劉嵩の「題石竹」詩（『槎翁詩集』巻八）に「記得月明江浦夜、舟人解唱竹枝詞（覚えているのは月明かりのもと川のほとりの夜、船頭が竹枝詞のうたを達者にうたったこと）」という例もあって確実なことはいえない。仮に「南浦」としておく。○春酔酒錢麤……金の李夷の「贈王南雲」詩（『歸潛志』巻二・巻六）に「石鼎夜聯詩句健、布嚢春醉酒錢麤（韓愈らの石鼎聯句にならって夜聯句すればその詩句は力強く、布の袋でこして春に酔えば酒手は豪快に消える）」とあり、明らかにこの句を踏まえているものと思われる。従って、各本のように改める必要はなく、「鹿」は「麤」の誤りと思われる。

[訳]（酔っ払ったまま宮中を出るしぐさ）昔の人もやはりこうだった。酒は劉伶の墓の土数尺の下までは届かないことを思えば、書架には天子より三通のお召しの手紙なぞという立身出世に何の未練もあるものか。あの酒は、日照りを救う慈雨や心を洗う甘露、渇き潤す青梅や頭にいただく醍醐にもまさるもの。味見したうえで買おうと、けちけちちょびちょび買おうと、高値でどんどん買おうとかまいはせぬ。月明かりさす川のほとり、金に糸目をつけず春の夜に酔いしれようぞ。

［太真、祿山送末了］［出朝科］［末云了］

【三煞】娘二（娘）甚酒中真潔真賢婦。祿山甚才（財）上分明大丈夫。

止不過琖号温涼、布名火院（浣）、瓶置玻璃、樹長珊瑚。犀澄（沈）離水、裙織綾絹、簾捲蝦須。真珠琥珀、紅瑪瑙、紫瑼璖。

〔校〕○真潔……鄭・寧本は「貞潔」に改める。○才上……鄭・寧本は「財」に改める。徐本は敢えて「才」を残し、「才」と「財」との諧音と説明する。○火院……鄭・徐本は「火浣」、寧本は「火烷」に改める。○犀澄……徐・寧本は「犀沈」に改める。○瑼璖……鄭・徐本は「瑼璖」、寧本は「硨磲」に改める。ただし徐本以外は校記を付さない。

〔注〕○太真、祿山送末了……楊貴妃と安祿山は密通を知られていると分かって、不安になってついてくるのであろう。次の曲はそれに対する皮肉と思われる。○酒中真潔真賢婦……本劇では「眞」ではなく「真」が用いられており、字形から見ても、「真潔」は「貞潔」の誤りであろう。成語のように見えるが、他に用例は見つからない。なお『天寶遺事諸宮調』では、酔った楊貴妃のもとに安祿山が夜這いを掛けることになっている。○才上分明大丈夫……他の用例から見て「才」は「財」に改めるべきであろう。「金にきれいなのが男の中の男」という当時の諺。劉時中【端正好】套「上高監司」【十】「向庫中鑽刺眞強盜、卻不財上分明大丈夫（倉庫から頂戴するのは本物の強盗、全くもって金にきれいなのは男の中の男というものでございます）」、「對玉梳」（古名家本）第三折【鬪鵪鶉】「這的是你財上分明大丈夫。賊兒膽底虚（これは全く金にきれいなのは男の中の男、悪党は後ろ暗いものという奴ね）」。無論、徐本がいうように「財」と「才」を掛けて「才能すぐれたものこそ男の中の男」という意味を裏に隠している可能性はあるが、表記としては定型表現に沿って「財」とするのが妥当であろう。なお、「禄」が「財」の縁語であることも意識している可能性があろう。続きの内容から考えると、楊貴妃と安祿山はここで買収を持ちかけるのかもしれない。○温涼……「琖」は「盞」に同じ。杯のこと。「温涼盞」は、中の酒を冬には熱く、夏には冷たくするという歴史物語に多く見える伝説上の宝物の名。「楚昭公」（内府本）第一折【鵲踏枝】に「便休提呉姫光顛碎了温涼玉盞。他直教秦公子曲躬躬親送潼關（呉の姫光が温涼玉盞を落として割ってしまったことなどいうに及ばぬ。伍子胥は秦の公子に恭しく潼関まで送らせたのじゃ）」とあるのは、有名な十八国臨潼闘宝の物語を踏まえたものであり、『列國志傳』巻五に見える十八国の秘宝一覧には、秦の宝として温涼盞が説明入りであげられている。同様の宝は、『成化説唱詞話』の「張文貴傳」にも見える。○火院……火浣布のこと。石綿製の耐火布。早くは『三國志』魏書巻四「齊王紀」「西域重譯獻火浣布。詔大將軍太尉臨試、以示百寮（西域の遠国から火浣布が献上された。大将軍・太尉に詔勅を下して試させ、百官に示した）」などの例がある。なお、寧本のように「火烷」と表記する例はない。○犀澄離水……徐本は「澄」を「沈」に改めて、『抱朴子』「内篇」巻四に「通天犀、角三寸以上刻以爲魚而銜之以入水、水常爲人開（通天犀の角で三寸以上のものを彫って魚の形にし、それを口に入れて水に入ると、水は必ずその人のために開く）」を引き、寧本も従うが、意味がよく分からない。南宋の呉泳の「壽鄒都大」三首之三（『鶴林集』巻四）に「壺中日月春長在、且試犀沈一瓣薫（仙界の日月はとこしえに春、ともあれ犀沈のひとひらの香を試そう）」

と見え、南宋の周紫芝に「劉文卿焼木犀沉爲作長句（劉文卿が木犀沈を焚いたので、そのために長句を作る）」（『太倉稊米集』巻二十五）という詩があり、『續古今攷』巻三十に「素馨茉莉木犀沉檀皆可調合丸藥（素馨・茉莉・木犀・沈檀はみな丸薬に調合することができる）」と見えることから考えて、木犀と沈香を合わせたもののことではないかと思われる。〇蝦鬚……「蝦の鬚」から転じて細いものを編んで作ったものにたとえられる。御簾を指すのが一般的。早くは唐の陸暢の「簾」詩に「勞將素手捲蝦鬚、瓊室流光更綴珠（疲れた様子で手にエビのひげのようなすだれを巻き取れば、麗しい部屋に流れる光は真珠をつないだよう）」と見え、以後詩詞に例は多いが、この句と同じ言い回しは南宋の王之道の【燕春臺】詞に「簾巻蝦鬚、清風時自南來（エビのひげのすだれを巻き上げれば、清風が時々南からやって来る）」と見え、元曲にも「牆頭馬上」（古名家本）第四折【粉蝶兒】「簾捲蝦鬚。冷清丶（清）綠窓朱戸想殺鰥寡孤獨（エビのひげのすだれを巻いて、さびしい緑の窓、朱の戸でわびしい身の上のことを想いふける）」などの用例がある。〇瑼璖……鄭・寧本がいうように「琿璖」の誤りであろう。原本の「瑼」はかなり不鮮明であり、「琿」の崩れたものとも見えないことはない。通常は「車渠」と表記されるもので、『藝文類聚』巻八十四「車渠」に述べられているように宝玉の一種である。ただし、同書同巻「貝」などに見える『尚書大傳』に「大貝如車渠」という記述があることからか、大蛤のことを呼ぶこともあり、ここでいうのがいずれであるかは定かではないが、時代が遅れると貝の方を指すことが多いようである。なお、寧本が採用する「硨磲」も同一物である。

〔訳〕［楊貴妃・安祿山が末を送る］［朝廷を出るしぐさ］［末がいう］お妃様が「酒に酔っても貞節なのがまことの良妻」とはちゃんちゃらおかしい、祿山どのが「金にきれいなのが男の中の男」とはとんでもない。せいぜい、盃の名は熱いも冷たいも思いのままの「温涼」、布の名は燃やしても焼けぬ「火浣」、置かれた瓶は玻璃のもの、伸びる樹は珊瑚、水より出でた犀沈の香、スカートは綾絹の織物、すだれにはエビのひげを巻き、真珠と琥珀、紅瑪瑙、紫の螺鈿というまでのことでございましょう。

【二煞】這个曾手扶万丈擎天柱。這个曾口吐千年照殿珠。只消的一管霜毫、数張白紙、寫万古清風、不勾一酔工夫。怕我連真帝（帶）草、一劄数黒論黄、寫㑥（倣）描朱。從頭至尾、依本畫葫芦。

［校］〇寫㑥……各本とも「寫倣」に改める。

［注］〇擎天柱……「天を支える柱」ということから、国家を支える重要人物や大黒柱にたとえられる。南宋の劉過の「嘉泰開樂日、殿岩涇原郭季端邀遊鳳山、自來美堂而上湖亭海觀梅坡石林無不歷覽、最後登沖天樓下介亭觀騎射歌舞、賦詩而歸」詩（『龍洲集』巻二）に「衆賓捧酒壽主人、將軍自是擎天柱（賓客一同酒を捧げて主人を寿げば、将軍はもとより天を支える柱というべきお方）」と見え、元雜劇でも「范張雞黍」（元刊本）第四折【九煞】「只因損折了那一條白玉擎天柱、因此上陪與這萬丈黄金架海梁（あの一本の白玉でできた天を支える柱を失ったがため、それゆえにこの万丈の黄金でできた海をまたぐ梁をかわりとするのです）」など例が多い。〇照殿珠……宮殿を照らすこと

ができるという伝説上の夜光珠。『張協狀元』第三十二出の末の白に「怕你貪觀天上中秋月、失却盤中照殿珠（おぬし、「天上なる中秋の月を見るにかまけて、大皿の中なる照殿珠を失う」ということなるのではあるまいか）」と見え、『水滸傳』（容與堂本）第六十七回の回末にも、「正是貪觀天上中秋月、失却盤中照殿珠」とある。〇万古清風……陸龜蒙「二遺詩」に「萬古清風吹作籟、一條寒溜滴成穿（古今にわたり吹き続ける清風が松を響かせ、一筋のしずくがしたたって穴を穿つ）」など用例は多いが、文字通り風を意味する場合以外は、いずれも嚴光や伯夷などの高潔な人品を表現するもので、書いたものを意味する例はないように思われる。〇連真帯草……楷書と草書を交えること。白話文学に特徴的に見られる表現である。小説に『警世通言』第十一巻「蘇知縣羅衫再合」の「獨有一處連眞帶草，其字甚大（中に一つだけ、楷書に草書を交えて、とても大きな字で書いてあるものがありました）」などの例があり、元曲においては「帶草連眞」という形で張可久【湘妃怨】「春晩」に「愁紅慘綠泪千行。帶草連眞紙半張（紅の花緑の葉を見るにつけ涙があまた流れ、草書に楷書をまじえて半枚の紙に書き付ける）」などの例がある。〇数黒論黄……あれこれいいたてることか。「霍光鬼諫」（元刊本）第一折【六么序】「到咱行數黑論黃。賣弄他血氣方剛。武藝高強（わしらに向かってあれこれいいたて、血気盛んで武芸にすぐれることをひけらかす）」など。〇依本畫葫芦……北宋の魏泰の『東軒雜録』巻一に、陶穀が昇進を求めて運動したことに対して、「太祖笑曰、頗聞翰林草制、皆檢前人舊本、改換詞語。此乃俗所謂依樣畫葫蘆耳。何宣力之有（太祖〔趙匡胤〕は笑っていわれた。「翰林院で詔を書くときは、先人の作例を調べて言葉を入れ換えるとか聞いておるぞ。これは世間でいう手本通りに瓢箪を書く〔丸写しということ〕という奴じゃ。何の功績があるものか）」というのを承けて、陶穀が「堪笑翰林陶學士、年年依樣畫葫蘆（お笑いぐさだよ陶学士は、毎年手本の丸写し）」という詩を壁に書き付けたとある。趙匡胤の言葉から見ると当時のことわざだったようであるが、以後この故事を踏まえてよく用いられ、「依本畫葫蘆」という形も、南宋の周必大『玉堂雜記』巻下などに見られる。

［訳］こちらはこの手で万丈の擎天柱を支えたこともあれば、千年も宮殿を照らす珠の如き言葉を吐き出したこともある。筆が一本、白い紙が数枚ありさえすれば、とこしえに吹き渡る清風の如き文を書くのに、ほろ酔い気分になるほどの時もかかりはせぬ。わしなら楷書と草書をとりまぜて、いろいろいいたいことをいいながら、臨書して見せてやる。はじめから終わりまで、お手本どおり描いてみせよう。

【尾】那是安祿山義子台怒。子是楊貴妃賊兒膽底虚。似這般忒自由沒拘束。猛軒騰但發路（露）。交近南蛮至北隅。接西边去東魯。一年多半載余。那里景凄涼地悽楚。軃袖垂肩仕女圖。似秋草人情日二(日)踈。待寄肖（蕭）娘一紙書。天北天南雁一（亦）无。忽地興兵起士卒。大勢長駈入帝都。一戦功成四海枯。得手如還入宮宇。一就无毒不丈夫。玉殿珠楼尽交付。抵多少燭滅烟銷帝業亏、十万里江山共宝物。和那花朶児渾家做不得主。

［下］［一行下］

〔校〕○尾……各本とも「煞尾」に改める。○台怒……鄭本は「心中怒」、徐・寧本は「台意怒」に改める。○發路……各本とも「發露」に改める。○天北天南……寧本は「地北天南」に改める。○肖娘……鄭本は「蕭娘」とする。徐・寧本は簡体字を使用しているため「肖娘」のままである。○一無……鄭・寧本は「也無」、徐本は「亦無」に改める。○帝業亐……鄭本は「帝業輸」、徐本は「帝業虧」、寧本は「帝業汚」に改める。

〔注〕○台怒……ここは四ー三リズムの七字句であり、このままでは一字不足する。徐・寧本のように「台意怒」とするのが妥当か。○賊児膽底虚……悪党は後ろ暗いもの。「博望燒屯」（元刊本）第二折【牧羊關】に「直闘得逆子心頭怕、常謊得賊兒膽底虛（悪者めがこわがるまで戦い抜いて、悪党は後ろ暗いものというように絶えずびっくりさせてやれ）」とあるほか、【三煞】の注で引いた「對玉梳」のものなど、元曲には用例が多い。○拘束……制約を受けること。『董西廂』巻一【醉落魄纏令】套【整金冠】「放二四不拘束、儘人團剥（したい放題とらわれることとてなく、いいたい奴にはいわせておくまでのこと）」など。○軒騰……他に「看錢奴」（元刊本）第一折【（寄生草）么】に「動不動軒騰七代先靈罵。坑陷得一郡衆生打。欺負得五嶽神祇怕（何かといえば騒ぎ立てて七代前のご先祖様まで罵り、郡中の人々を陥れてぶんなぐり、五嶽の神様をコケにしてこわがらせる）」という用例がある。「掀騰」と同じ意味であろう。○發路……意味から考えて、各本のように「發露」に改めるのが妥当であろう。ただし「發露」は一般に広く用いられる語ではあるが、元曲では他に用例がない。○交近南蛮……以下のくだりは、都から追われることになる安祿山のさびしさをうたうものであろう。『天寶遺事諸宮調』には、別離後の安祿山の悲しみをうたう曲が多く含まれる。○秋草人情日日疎……金の趙秉文の「寄王學士」詩（『滏水集』巻七）に「浮雲世態紛紛變、秋草人情日日疎。李白一盃人月影、鄭虔三絶畫詩書（浮雲の如き世の様は次々に変わり、秋草のように人の気持ちは日ごとに薄れゆく。李白の如く人・月・影の戯れる中一杯の酒をあおり、鄭虔の如く詩・書・画の三つすべてにすぐれるが）」とあり、『歸潛志』巻八によれば当時非常に名高い作だったという。「魯齋郎」（古名家本）第三折【耍孩兒】にも「浮雲世態紛紛戀（變）、秋草人情日日疎」とこの詩そのままの句が見える。○肖娘……「肖」は「蕭」と通用する。「蕭娘」は女性を指す語として頻用されるが、由来は定かではなく、梁の臨川王蕭宏が怯懦だったため北魏の軍に「蕭娘」と嘲られたことに由来するとも、隋の煬帝の蕭皇后が美女だったことによるともいう。「鶯鶯傳」に引く楊巨源の「崔娘詩」に「風流才子多春思、腸斷蕭娘一紙書（粋な才子は恋情多く、蕭娘よりの便りに断腸の思い）」とあるのに基づくものであろう。○天北天南雁一无……南宋の戴復古の「夜宿田家」詩（『石屏詩集』巻五）に「郷書十寄九不達、天北天南雁自飛（故郷への手紙は中のうち九までが届かず、天の南北へと雁が勝手に飛ぶのを見るばかり）」とあるのに基づくか。「天北天南」「天南天北」の例は多く、寧本のように改める必要はないものと思われる。「一无」は「亦無」「也無」のどちらでも通じ、ともに用例もあるので確定しがたい。仮に「亦」を当てておく。なお『天寶遺事諸宮調』の「祿山憶楊妃」【雁兒落】に「寄信魚難到、傳情雁不歸（便りを寄せようにも魚はたどり着きがたく、思

いを伝えようにも雁は帰って行かぬ)」とある。○一戦功成四海枯……唐の曹松の「己亥歳」二首之一の「憑君莫話封侯事、一將功成萬骨枯(どうか軍功で爵位を得ることなど語らないでくれ。一人の将軍の手柄のために一万人の骨が枯れ果てるのだから)」という名句をもじったものであろう。○一就……ひたすら、とことん。「紫雲庭」(元刊本)第三折【哨遍】(原本は曲牌名を欠く)「冷落了讀書院、一就把功名懶墮(勉強部屋にはご無沙汰で、科挙のことなど全くやる気をなくし)」。○無毒不丈夫……「任風子」(元刊本)第二折【倘秀才】「常言道壞衣飯如殺父母。[旦云了]自古道无毒不丈夫(下世話にも「飯の種を台無しにする奴は父母の敵同然」というじゃないか。[旦がいう]昔から「毒がないのは男じゃない」というだろうが)」など用例は多い。「望江亭」(息機子本)第二折の淨の白に「常言道恨小非君子、無毒不丈夫(下世話にも「恨みの少ないのは君子ではなく、毒がないのは丈夫ではない」と申す)とあるように、「恨小非君子」と対になるのが普通である。なお、元明白話の「君子」は男性に対する呼びかけなどに用いられる語で、ここでは「丈夫」の意味であろうと思われる。○燭滅烟銷……「燭滅香消」という形での用例は、『西廂記』(弘治本)巻一第四折の【折桂令】における「貪看鶯丶、燭滅香消(夢中で鶯鶯を見ていると、燭も香も消えてしまった)」以下用例が多いが、この形の例としては、商衢【新水令】套【梅花酒】の「孤幃兒靜悄悄。燭滅煙消。枕剩衾薄(さびしいカーテンの中はひっそりと、燭も消え煙も失せ、余分な枕に薄い掛け布団)」がある程度である。『西廂記』の用例は、文字通り法事で燭と香が消えたことをいっているが、通常はどちらの形であれ、孤閨の寂しさを形容する語である。○亏……通常は「虧」の略字であり、意味上も問題はないので、徐本に従って「虧」の意味で取るのが妥当であろう。○和……ここでは「～すらも」という意味であろう。○花朶兒渾家……「渾家」つまり女房とは下世話な言葉に思われるが、「鐵拐李」(元刊本)第二折【尾声】にも「花朶兒渾家不能恋。魔合羅孩兒不能見(花のような女房に執着することもならず、お人形さんのような子供に会うこともならず)」とあり、当時の定型表現と思われる。あえて皇帝と貴妃に対して庶民の言い回しを用いて寝取られ亭主の実態を暴いて見せているのでろう。

[訳] 養子の安祿山どのがお怒りじゃが、楊貴妃さまばかりは心にやましいことがあるのでびくびくものじゃ。かように勝手気ままなやり放題、いきなり騒ぎ出し、もしばれたら、南蛮から北の果てまで、西の方から東魯までさすらって、一年余りや半年余り、かの地にては景色はうら寂しく、土地は物悲しく、貴妃はといえば、袖を垂らしたなで肩の美人画さながらのやつれよう、秋草にも似て人の心も日ごとに遠のこう。祿山に便りの一つも送ろうと思えど、天の南北見渡せど手紙を託す雁もなし。にわかに兵を挙げ、兵士を起たせ、大軍長駆して都に入り、功はなれども四海は枯渇することとなろう。うまうまと宮殿に入ることができたなら、「悪でなければ男じゃない」という言葉そのままに、美しき高殿、華麗なる楼閣もことごとく安祿山の手に落ちて、唐王朝を興した偉業もなくなり、十万里の国土と宝物、果てはあの花のように美しい女房殿までも、思うようにすることはならぬはめとなろうぞ。

（二〇〇八年九月二六日受理）

［退場］［一同退場］

（1）（あかまつ　のりひこ　京都大学高等教育開発推進センター教授）
（2）（きん　ぶんきょう　京都大学人文科学研究所教授）
（3）（こまつ　けん　京都府立大学文学部教授）
（4）（さとう　はるひこ　神戸外国語大学外国語学部教授）
（5）（じゅん　しゅんせい　摂南大学外国語学部教授）
（6）（たかはし　しげき　摂南大学外国語学部教授）
（7）（たかはし　ぶんじ　大阪大学大学院文学研究科教授）
（8）（たけのうち　まこと　京都外国語大学外国語学部教授）
（9）（つちや　いくこ　佐賀大学文化教育学部講師）
（10）（まつうら　つねお　大阪市立大学大学院文学研究科教授）